



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第1章 斑鳩町の歴史的風致形成の背景

第1節 位置及び交通

斑鳩町は、大阪府との県境に近い奈良県の北西部に位置し、町域面積は14.7km²である。

また、交通を歴史的にみると、古くは大阪湾からの水運の要所であり、近世以降は、本町のほぼ中央を東西に走る奈良街道（大坂街道）をはじめ、諸街道が発達した。

現在は、大阪市と奈良市の間であって、両市へ向かう東西の交通機能が特に発達している。鉄道はJR関西本線が大阪と奈良を結び、本町の南部に法隆寺駅がある。道路ネットワークは東西方向の軸が国道25号で迂回路となる国道25号バイパスの整備が進んでいる。南北方向には国道168号と県道5号・9号がある。県道5号は町の南側を通る西名阪自動車道の法隆寺インターチェンジとJR関西線法隆寺駅、法隆寺を結んでいる。

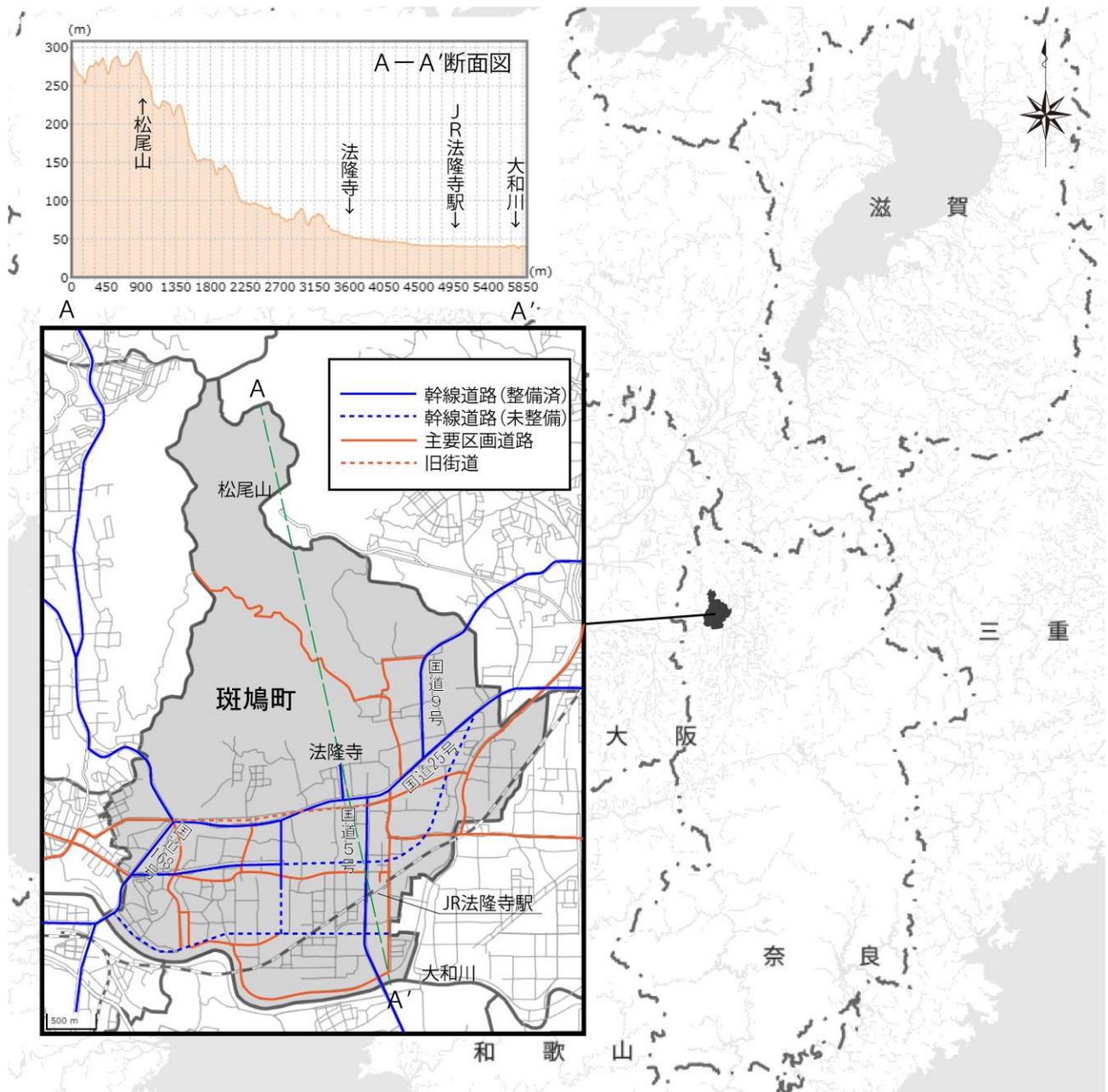


図1-1 斑鳩町の位置・交通



第2節 自然的環境

1 地勢

斑鳩町は、南部の大部分は平地であり、北部は丘陵よりなっている。本町の南境には奈良盆地の水を集めて西流する大和川がある。

南部の平地は奈良盆地の西北端にあたる一部であり、東西・南北それぞれ約3kmに渡って広がり、本町面積の過半を占める。南端に位置する大和川周辺は、奈良盆地全体からしても最低部に属し、かつ低平な地形であることから、古来より度々洪水の害を受けた地域である。地層は、主に新しい沖積層よりなっている。

北部の丘陵は生駒山地の一部を成す矢田丘陵の南端部にあたる。本町最高の松尾山（標高約315m）を有する海拔200～300mの丘陵であり、地質は主として花崗岩類で、麓に一部洪積層がある。

また、南端を流れる大和川には、北方矢田丘陵の東西両側を南流して来た富雄川・竜田川がそれらの小支流と共に流れ込む。平地に流出したこれらの河川は堆積が盛んに行われ、高い堤防からなる天井川をつくっている。

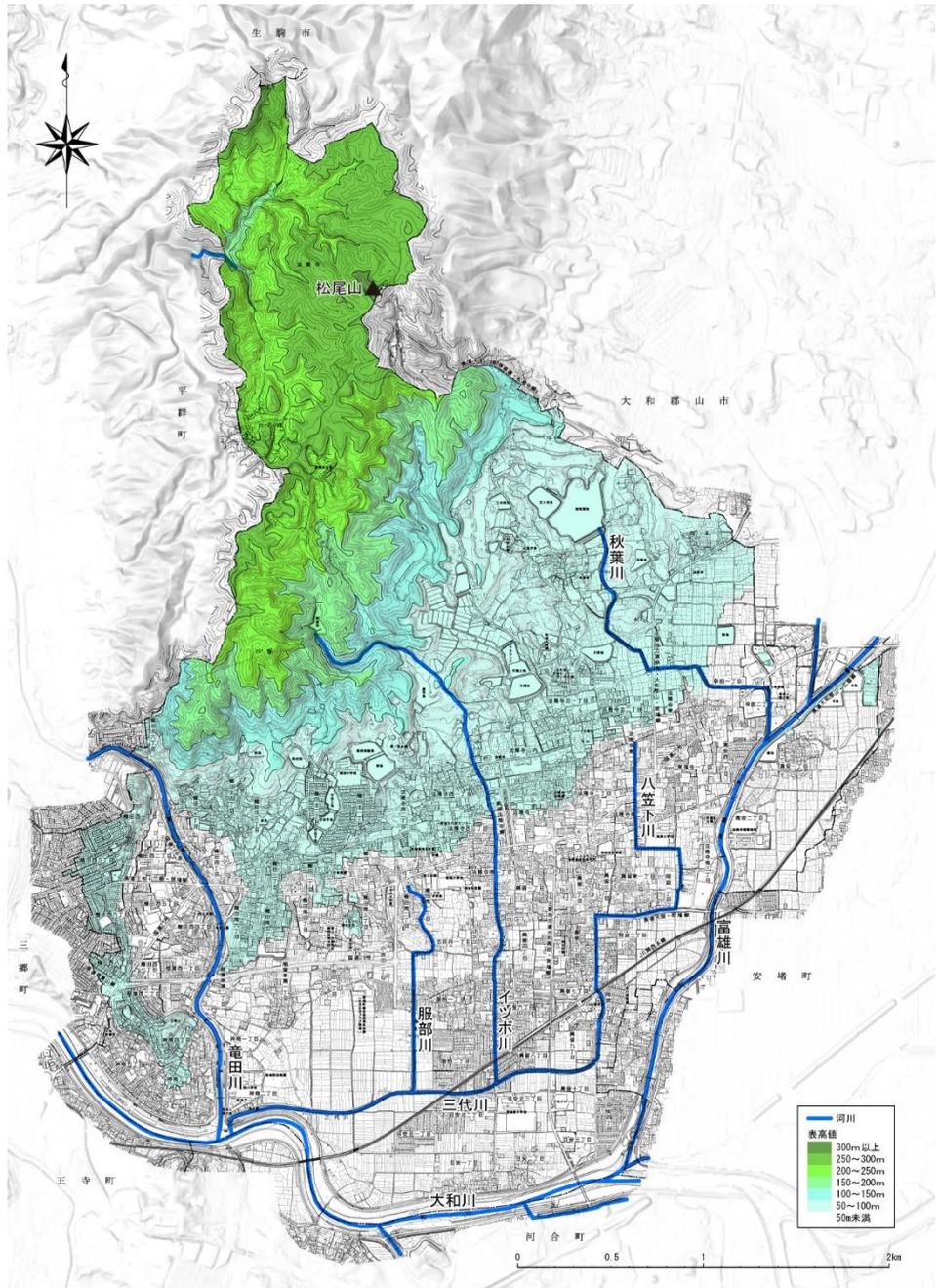
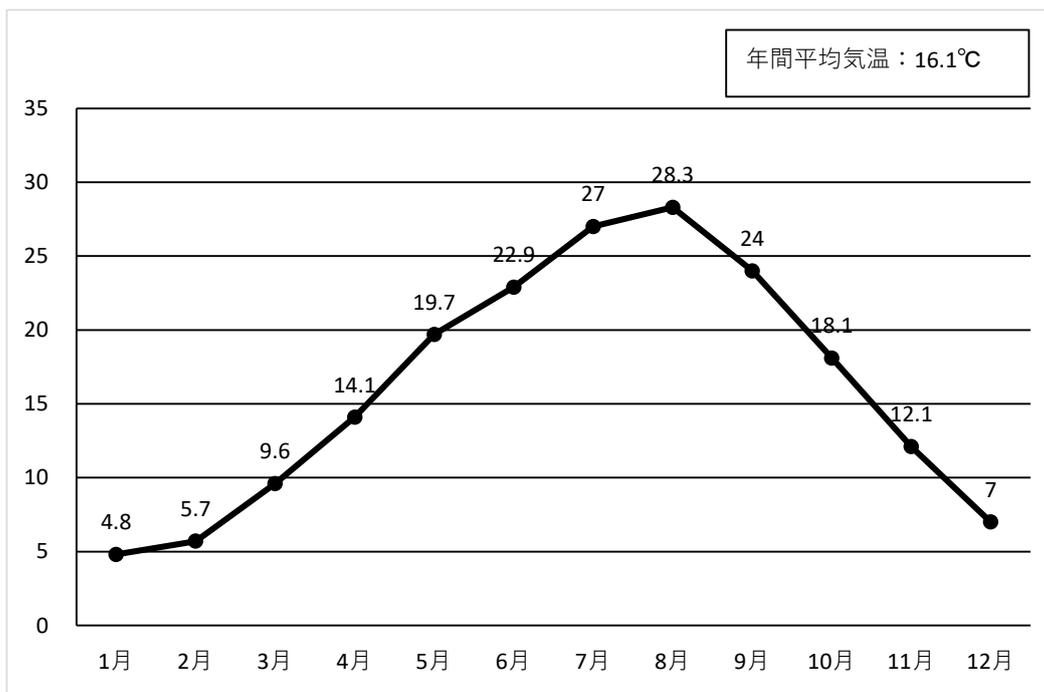


図1-2 斑鳩町の地形条件

2 気象

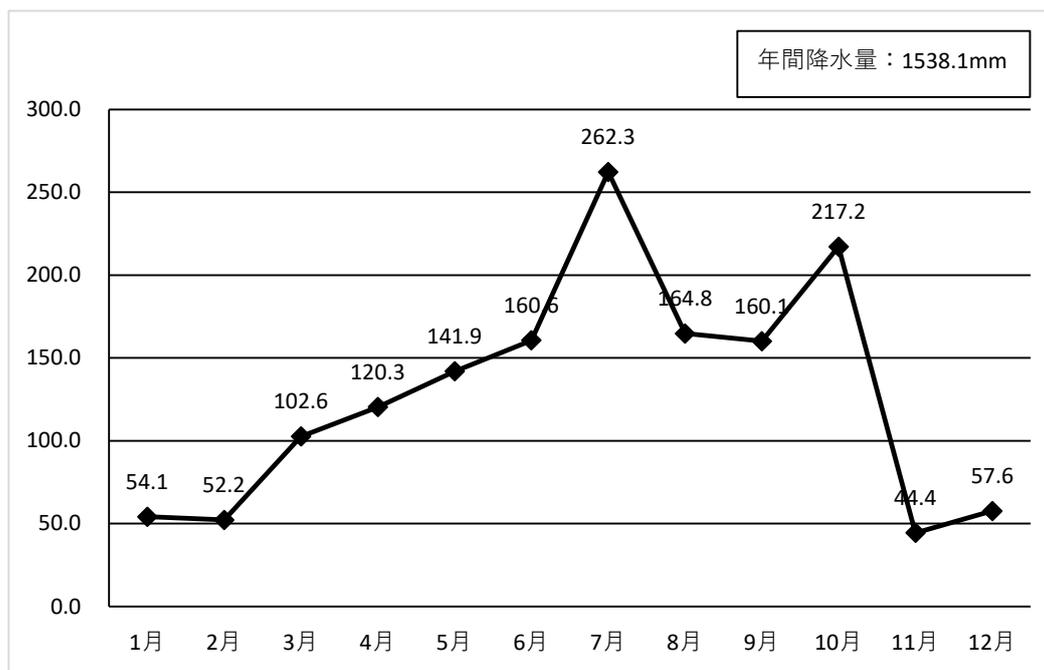
斑鳩町の気候は、海洋より離れ山地で囲まれた盆地特有の「内陸性気候」である。すなわち一般的には温和であるが、海洋性気候の地域と比較するとやや寒暖の差が大きく、降水量も少ない。

最近5年間の平均でみると、年間平均気温は16.1℃、年間降水量は1,538.1mmとなっている。降水量は夏季に多く、冬季に少なく、台風や梅雨の頃は特に多い。かつてはこの時期に洪水が起きることが多かったが、近年治水工事が進み、水害は少なくなっている。



資料：斑鳩町統計書（令和4年度版）※5年間（平成29年～令和3年）の平均値

図1-3 斑鳩町の年間平均気温



資料：斑鳩町統計書（令和4年度版）※5年間（平成29年～令和3年）の平均値

図1-4 斑鳩町の年間降水量

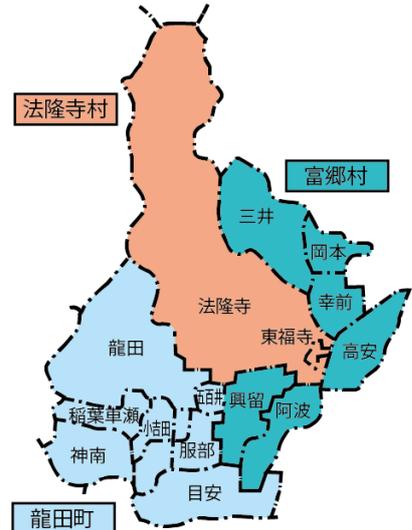
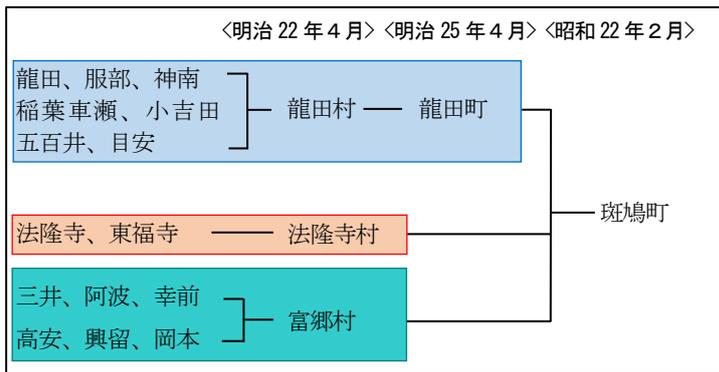


第3節 社会的環境

1 町の成立

現在の斑鳩町が成立したのは昭和22年(1947)である。

明治22年(1889)4月に市町村制が実施され、龍田村、法隆寺村、富郷村となり、龍田村は明治25年(1892)4月に龍田町となった。昭和22年(1947)2月に奈良県で最初の町村合併により、龍田町、法隆寺村、富郷村の3町村が合併して斑鳩町が誕生した。当時の人口は10,870人であった。

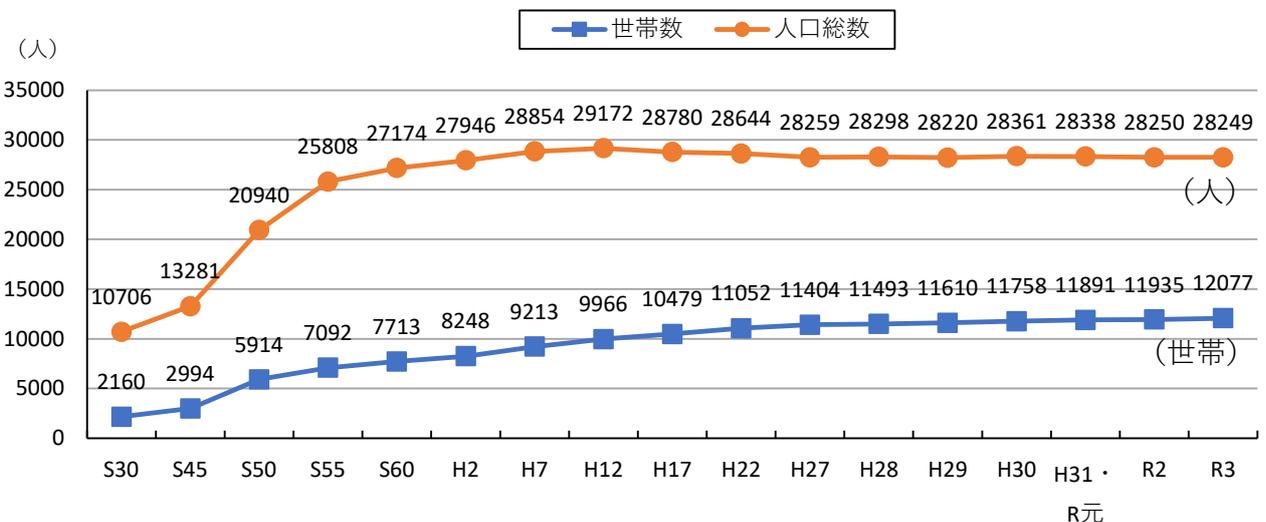


1-5 合併の経過と旧町村の区域

2 人口

令和3年(2021)の人口は、28,249人、世帯数は12,077世帯である。戦後、人口は急速に増加し、平成12年(2000)には昭和30年(1955)の約3倍の29,172人となったが、その後はなだらかな減少傾向にある。一方で、世帯数は昭和30年(1955)から増加傾向にある。

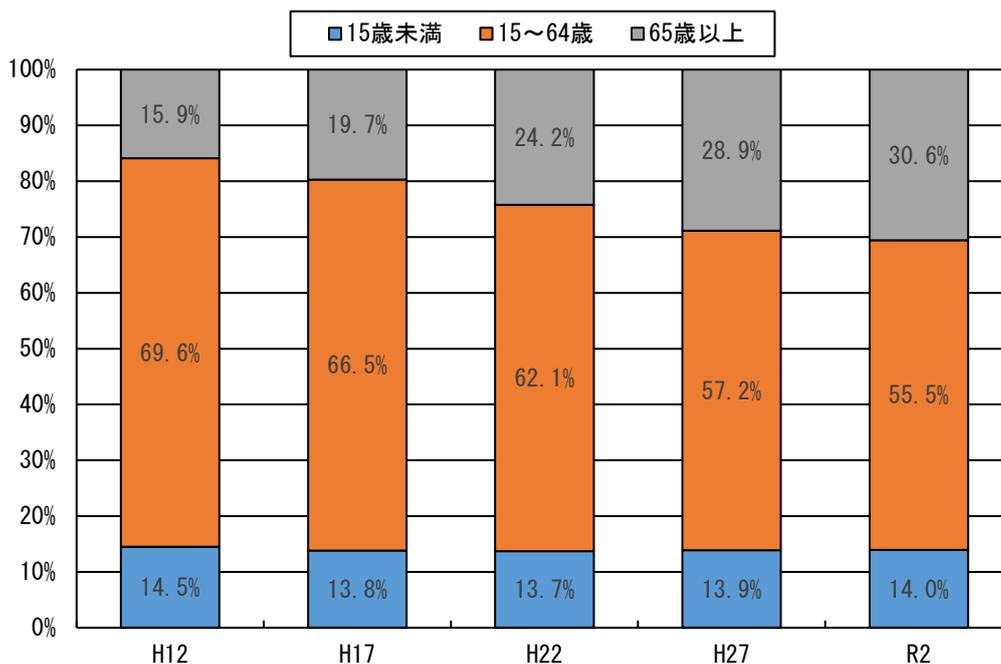
年齢別で見ると、少子高齢化が進み、平成12年(2000)には65歳以上の割合が15歳未満の割合と逆転し、令和2年(2020)には高齢化率が30.6%となっている。



資料：斑鳩町統計書（平成16・25、令和4年度版）

図1-6 斑鳩町の人口推移

- 序章
- 第1章
- 第2章
- 第3章
- 第4章
- 第5章
- 第6章
- 第7章



資料：斑鳩町統計書（平成16・24、令和4年度版）
 図1-7 斑鳩町の年齢別人口の割合推移

3 産業

斑鳩町の産業は古来より農業が中心であった。近代には、醤油、酒造等の食品製造の発展がみられ、現代に入ってから、工場誘致が行われたこともあり、製造業が盛んになった。

農業に関しては、令和2年(2020)の農家戸数は408戸、農業従事者数は597人である。また、事業所の状況をみると、令和3年(2021)時点で斑鳩町には817の事業所がある。

産業別生産額では、第三次産業の占める割合が最も多く、次いで第二次産業が多くなっている。

製造業に関して経済構造実態調査（令和2年(2020)）をみると、事業所数は35で、金属製品、プラスチック、パルプ・紙・加工品の順に事業所数が多くなっている。また、工業出荷額については、金属製品、化学工業製品、パルプ・紙・加工品の順で多くなっている。



表1-1 斑鳩町の農家戸数・従事者数の状況（資料：農林業センサス）

年別	農家数（戸）					農業従事者（人）		
	総数	専業・兼業別				総数	男	女
		専業	兼業					
			総数	第1種兼業	第2種兼業			
昭和 60年	752	66	686	64	622	3,408	1,611	1,797
平成 2年	686	52	634	84	550	3,219	1,524	1,695
7年	664	69	595	34	561	2,850	1,328	1,522
12年	594	35	559	19	540	2,608	1,244	1,364
17年	552	45	507	17	490	876	473	403
22年	519	36	483	28	455	739	406	333
27年	541	58	483	12	471	806	404	402

年別	農家数（戸）					農業従事者（人）		
	総数	販売			自給的	総数	男	女
		主業	準主業	副業的				
令和 2年	408	22	44	125	217	597	300	297

注：農業従事者欄においては、昭和60年から平成12年までは農家人口を記載。

平成17年からは農業従事者数（15歳以上の年齢の方が2月1日の調査時の1年間で自営農業に従事した者）を記載。

令和2年からは専業別の把握が廃止されたことから、販売農家（主業農家、準主業農家、副業的農家）と自給的農家に分類して記載。

表1-2 斑鳩町の事業所の状況（資料：経済センサス）

	事業所総数（事業所）	従業者数（人）
昭和56年	622	4,545
昭和61年	759	6,106
平成3年	987	7,204
平成8年	973	7,720
平成13年	947	7,388
平成18年	870	6,849
平成21年	849	6,828
平成24年	741	5,543
平成28年	746	5,531
令和3年	817	6,562

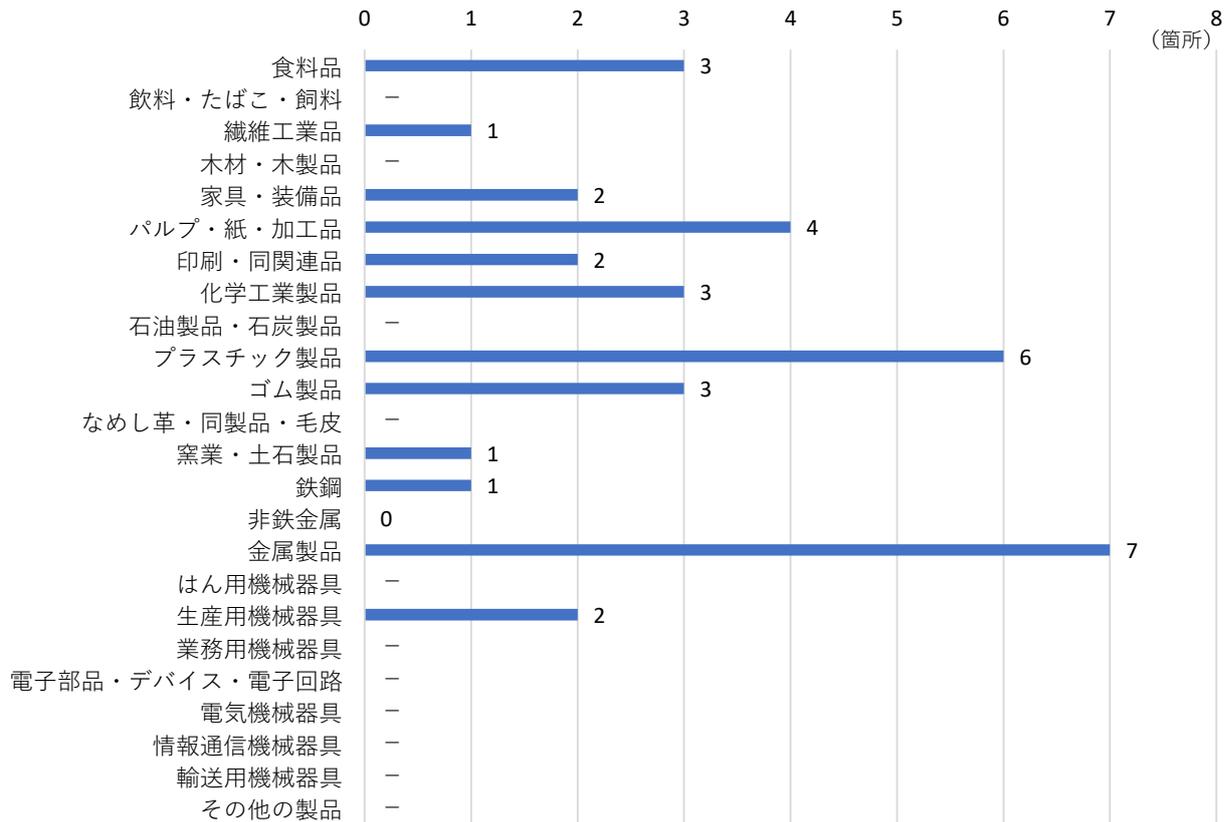
注：平成13年までは事業所・企業統計調査、平成18年・平成21年は経済センサス基礎調査、平成24年以降は経済センサス活動調査の結果を記載。

平成24年・平成28年の統計は「公務」は調査対象外。



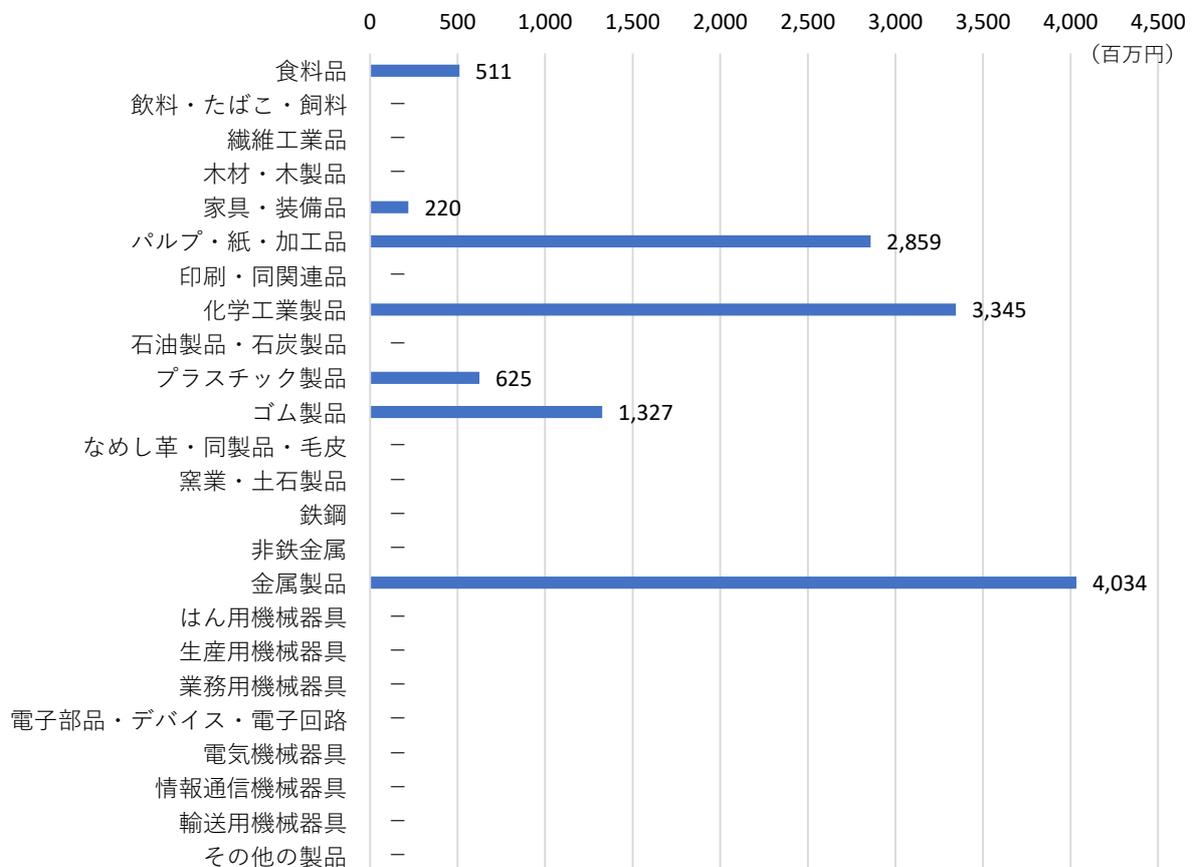
資料：斑鳩町統計書（令和4年度版）

図1-8 斑鳩町の産業別生産額



資料：経済構造実態調査（令和2年（2020））

図1-9 斑鳩町における工業事業所数



資料：経済構造実態調査（令和2年（2020））

注：工業出荷額の「-」は秘密保持上、秘匿したもの

図1-10 斑鳩町における工業出荷額



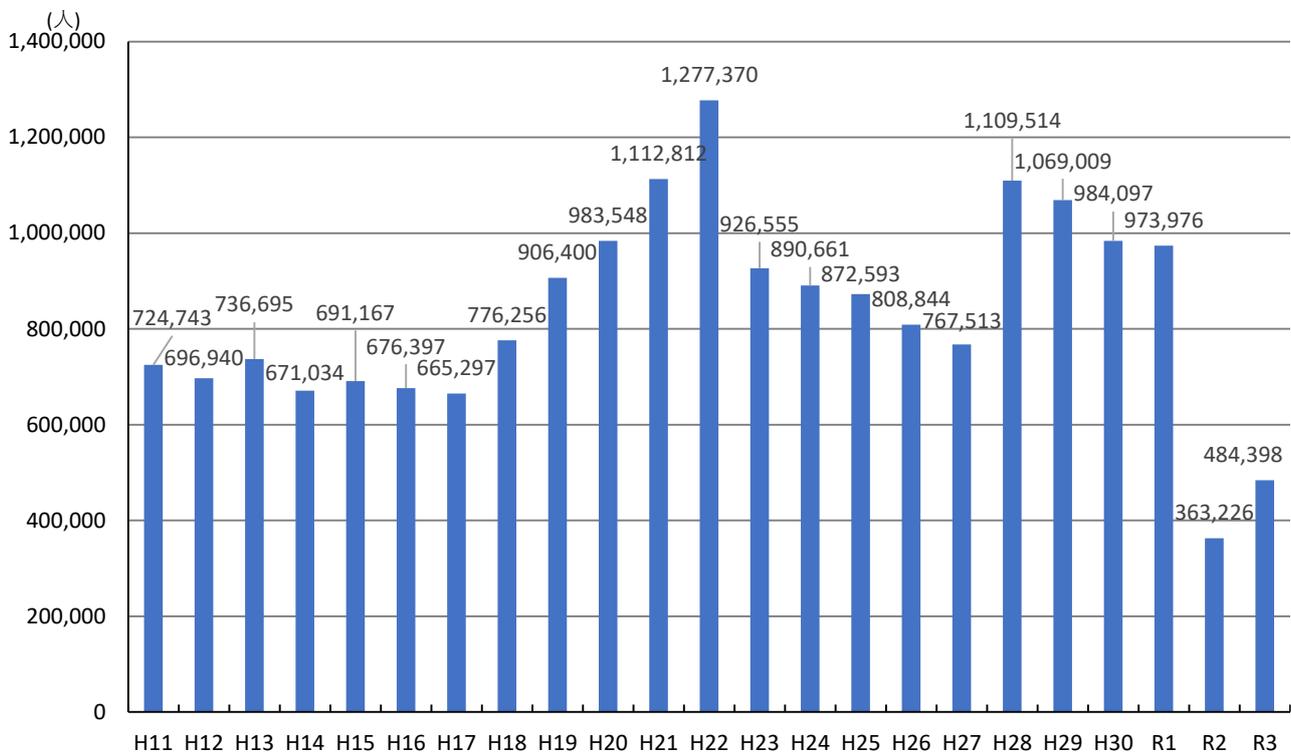
4 観光

斑鳩町は世界文化遺産に登録されている法隆寺をはじめ、豊かな歴史・文化遺産が矢田丘陵の山並みを背景とする自然環境の中で歴史的風土を形づくる、「斑鳩の里」として知られ、全国から観光客が訪れている。

近年、減少傾向にあった観光客数は平成18年(2006)より増加に転じ、平成22年(2010)には、奈良県全体の平城遷都1300年祭の取組みもあって、年間約127万人に達した。しかし、平成24年(2012)には、観光客数は年間約89万人と5年前以上に落ち込んだ。さらに、新型コロナウイルス感染症対策に起因する人々の外出自粛に影響して、令和2年(2020)の観光客数は年間約36万人にまで減少したが、同3年(2021)には約48万人を記録するなど増加の兆しを見せている。

主な寺院として、法隆寺、中宮寺、法輪寺、法起寺の拝観客数をみると、法隆寺が圧倒的に多く、令和3年(2021)には約29万人が拝観している。

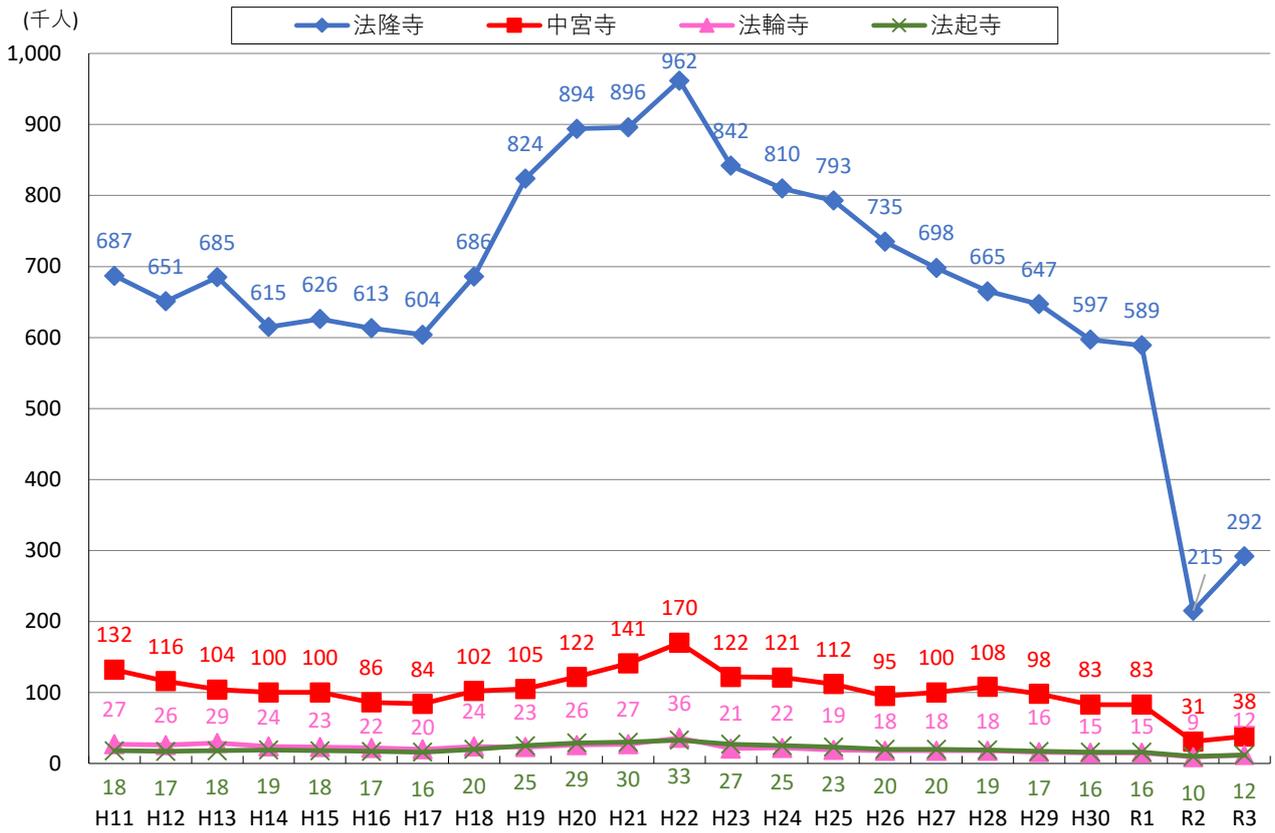
また、法隆寺観光自動車駐車場の利用状況をみると、バスの駐車場利用台数は平成18年(2006)の5,005台以降緩やかな減少傾向が続くが、令和2年(2020)には1,060台と大きく減少した。一方、乗用車の駐車場利用台数は、平成21年(2009)の22,929台以降増減を繰り返すが、令和2年(2020)には10,931台となっている。



資料：斑鳩町統計書（平成12・18・25、令和4年度版）

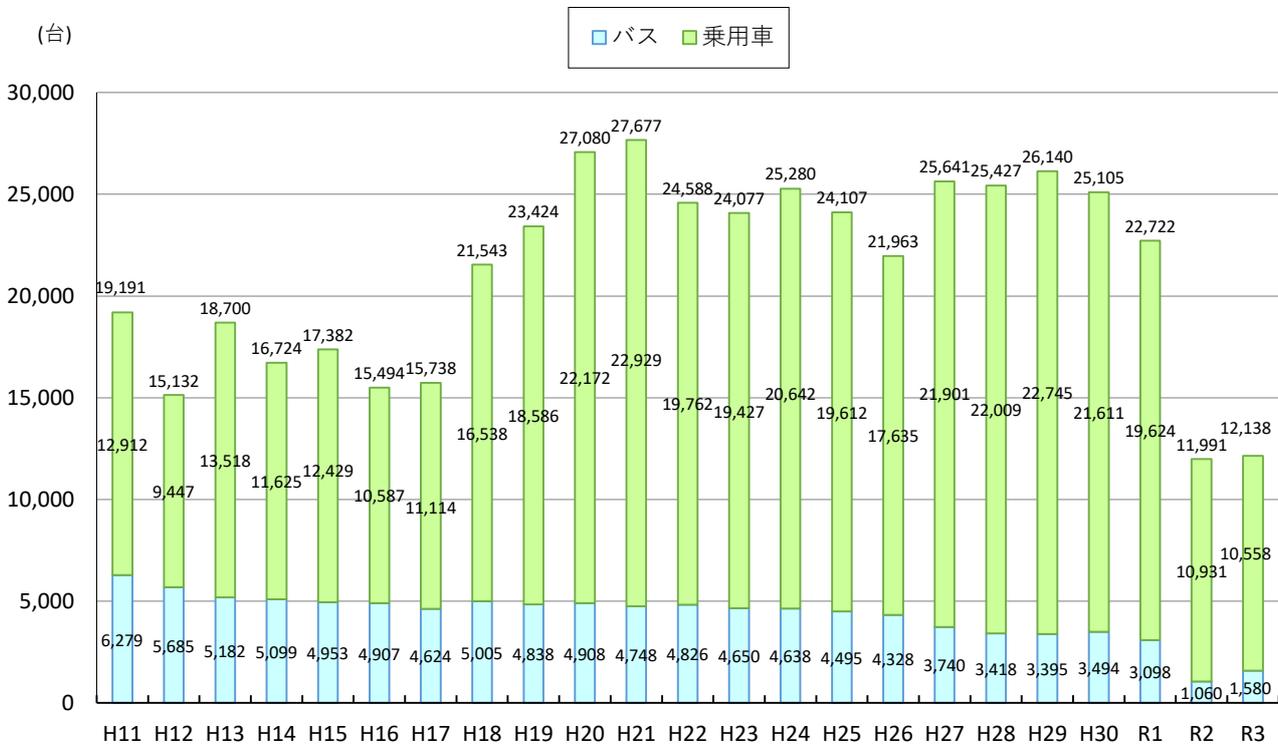
図1-11 斑鳩町の観光客数

- 序章
- 第1章
- 第2章
- 第3章
- 第4章
- 第5章
- 第6章
- 第7章



資料：斑鳩町統計書（平成12・18・25、令和4年度版）

図1-12 斑鳩町の寺院への拝観客数



資料：斑鳩町統計書（平成12・18・25、令和4年度版）

注：令和元年度より、斑鳩町マルシェ・宿泊施設等事業者誘致事業に伴い、法隆寺観光自動車駐車場の運営主体が株式会社竹荘となった。

図1-13 斑鳩町の寺院への拝観客数



第4節 歴史的環境

斑鳩町は、歴史・文化の豊かなまちである。こうした歴史の中でも、飛鳥時代における聖徳太子の上宮王家または法隆寺等の古代寺院に関わる歴史は、その後の本町の形成において最も影響を与えた、本町の歴史を語る上で欠くことのできない重要な歴史的背景となっている。

そこで、それらの点に留意しながら、本町の歴史を時代順に追って概観する。

1 旧石器～弥生時代

旧石器時代については、町内において遺跡として確認されていないが、酒ノ免遺跡に隣接する南西部における発掘調査では、旧石器時代後期の国府型ナイフ形石器がみつかったことから、少なくともこの頃には、人の生活または往来があったと想像される。

縄文時代になると、土器や石器の出土がみられ、その代表的な遺跡が、法隆寺の北方にひろがる「寺山」と称される地域において展開している西里遺跡である。遺跡からは、現在までに竪穴住居址などの遺構が確認されてはいないものの、発掘調査における出土や踏査による表面採集から、人々の生活の痕跡を示す縄文土器片や石器がみつき、この頃には、人々がこの斑鳩の地に定住していたことが推測されている。このように、町内の縄文時代の様相については明らかでないものの、丘陵上に小規模に散在する形での集落が形成されていたと想定されている。

弥生時代では、発掘調査が実施された遺跡があるものの、これまでに具体的に明らかとなっている遺跡の調査例は少ない。現在斑鳩町文化財活用センターのある箇所を中心とした西里遺跡においては、弥生時代中期頃の集落内におけるリーダーたちの墓である方形周溝墓群が確認されており、また同遺跡内に所在する藤ノ木古墳の墳丘及びその周辺からも、中期を中心とした土器や石器が出土している。一方、法隆寺の北東方



東里遺跡の弥生土器出土状況

向の小丘陵上に所在する東里遺跡は、中期から後期にかけての集落遺跡で、竪穴住居址の検出のほか壺や甕などの土器や石鏃・石錐などの石器の出土が確認されている。また服部地域の発掘調査においては、中期の溝や土坑等の遺構の検出と前期から中期の壺や甕などの土器の出土があり、水田による生産域である可能性のある低湿地における集落として注目される。またそのほかに、岡原遺跡、法隆寺周辺遺跡、酒ノ免遺跡、上宮遺跡、中宮寺跡周辺遺跡などの遺跡においても、弥生土器の出土が確認されている。また、表面採集遺物やその立地条件等から、これらの遺跡のほかに、神南地域、北庄地域、興留地域にも弥生時代の遺跡の存在が推定され、各丘陵上には集落が展開していたと想像できる。このように、斑鳩町域における弥生集落は、奈良県内の唐古・鍵遺跡等の弥生集落と比較すると小規模ではあるが、ようやく人々の集住が進み、ムラの形成がなされたことがうかがえる。

なお、起源がいつ頃のものは不明であるが、古代信仰と考えられるものに、神南地域に所在する三室山がある。この山は、奈良県桜井市に所在する三輪山と同様に神奈備山であり、古くから山そのものが御神体として信仰の対象となった古代の信仰遺跡である。その起源は不詳であるが、信仰の拠りどころとしてお社が成立し、『延喜式』（平安時代中期成立）に記載される式内社の一つである神岳神社となっている。そのことはこの三室山に関連して地名も名付けられたようで、「かなび」がその後「かみみなみ」となり、漢字表記で「神南」となって今日に至っている。

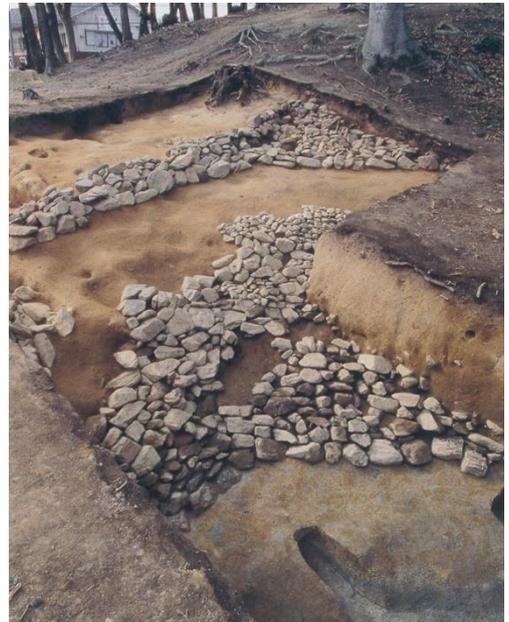


三室山

2 古墳時代

古墳時代は、その名に冠されているとおり、大王を頂点とした豪族等有力者の墳墓である古墳が、遺体を埋葬するという機能以外に、権力の象徴として政治的なモニュメントとしての側面を持って造営された時代である。特に古墳における副葬品は、当時の国外との交流や製作技術等の情報を有する例もあり、我が国の歴史だけでなく文化等を知ることができる。斑鳩町内には、70基程度の古墳が確認でき、また集落遺跡も確認されている。町内の主な古墳と集落遺跡として、次のようなものが所在している。

中宮寺跡の南方約300m（国道25号沿線）には聖徳太子の愛馬であった黒駒を葬ったとする伝承をもつ駒塚古墳がある。全長60mほどの前方後円墳で、平成12年度（2000）より実施した発掘調査において、墳



駒塚古墳の発掘調査状況

丘内より古墳時代前期の二重口縁壺の破片が出土したことから、近年は従来考えられていた古墳時代中期ではなく、4世紀後半頃の前期古墳ではないかと推測されている。また、駒塚古墳周辺は東福寺遺跡と呼ばれ、4世紀から5世紀頃の土師器（布留式土器）や木製農耕具（木鋤）が埋納された大型の土坑群が検出されている。また、これらの土坑と類似したものは、東側に隣接する安堵町の東安堵遺跡でも検出されていて、遺構の性格として土坑墓または祭祀土坑が推定されている。こうした遺構の性格と、住居址は未だ発見されていないことから、集落遺跡と断定できていない。



斑鳩寺（法隆寺）の南西約900mの平野部には、5世紀前半頃造営の直径約35mの円墳と考えられている斑鳩大塚古墳がある。この古墳は墳丘上に忠霊塔を建設する工事中に発見され、埋葬施設の半分以上は削り取られていたが、埋葬施設からは銅鏡2面をはじめ筒形銅器、甲冑^{かっちゅう}、鉄刀^{いしくしろ}、石釧等の豊富な副葬品が出土している。同じ頃、法起寺の北西方向には、町内で最大規模を誇る瓦塚古墳群が造営された。この瓦塚古墳群は、全長約100mの前方後円墳2基と円墳1基からなる5世紀前半頃の前古墳群で、埋葬施設が明らかとなっていないものの、瓦塚1号墳墳丘における発掘調査が昭和50年(1975)に実施され、家形埴輪等のまとまった形象埴輪やくびれ部付近において祭祀品であった魚形土製品等が出土し、古墳研究において大変重要なものとなっている。なお、この瓦塚古墳群の歴史的位置付けとしては、古墳時代前期の首長の支配域を斑鳩地域のみでなく拡大して解釈し、例えば平群^{へぐり}氏のような大豪族が、現在の大和郡山市と平群町の範囲を含めた広い地域の支配をした場合、現在大和郡山市に所在する小泉大塚古墳以後の首長墓の系譜上に瓦塚古墳群を位置付けられるとする考えもあるが、本町の古墳時代前期から中期初め頃の様相は、発掘調査が実施されていないこともあり、不明な点も多い。



斑鳩大塚古墳



瓦塚1号墳出土の埴輪

大和王権が盤石となった古墳時代中期においては、斑鳩町域において現在までに大規模な墳丘を有する古墳は確認されていない。しかし、法隆寺境内より大型の円筒埴輪が出土していることと、法隆寺の南方のヒツメ金塚古墳、舟塚古墳、亀塚古墳等の小規模の古墳が所在することや、ほかの中宮寺跡周辺遺跡や上宮遺跡において埴輪片が出土していることなどから、飛鳥時代以降の土地利用によって削平された古墳があったことは、明らかである。また、斑鳩大塚古墳の立地する丘陵に並行する小丘陵上に所在する五百井^{いおい}遺跡において新規に発見された古墳のほか、戸垣山古墳など小規模な古墳が点在しており、海拔45m付近を東西に古墳が並び姿が想定されている。また、駒塚古墳の立地する微高地には駒塚古墳南方100mに直径30m程度の円墳である調子丸古墳がある。周辺において出土した埴輪から5世紀代の古墳と考えられ、太子信仰に基づき名付けられたものと思われる。また、この古墳造営の背景となった集落遺跡に酒ノ免遺跡がある。古墳時代後期になると舟塚古墳があり、また、斑鳩町内の小規模な古墳群として、寺山古墳群、樋崎古墳群、三井古墳群、神南古墳群などが確認されているが、詳しい内容については明らかでない。



舟塚古墳（発掘調査状況）

そして、地域の首長墓の系譜からは突出するものとして、法隆寺西院伽藍さいいんの西方約350mに藤ノ木古墳ふじのきこふみ（史跡）がある。古墳は直径50m以上、高さ9mの円墳で、副葬品などから6世紀後半に造営されたと考えられる。昭和60年(1985)に行われた第1次調査では、石室内に埋置された割抜式冢形石棺くりぬきしきいえがたせつかんが未盗掘で発見された。石室の奥壁と石棺の間から金銅装透彫鞍こんどうそうすかしほりくら金具かなく しすわ（後輪）に代表される装飾性豊かな馬具が出土し一躍世界から注目される古墳となった。ほかに石室からは埋葬時の儀礼に使った須恵器などの土器がまとまって出土している。



藤ノ木古墳

また第3次調査では、石棺内に2人が埋葬当時の状態で合葬されており、人骨の調査から17～25歳と20～40歳の男性である可能性が高いことがわかった。副葬品には、被葬者の権力を示す金メッキを施した冠くわんや履などの金銅製品のほか、装飾性豊かな大刀や剣などの武器類、銅鏡うづつたま、空玉やガラス玉などのおびただしい数の玉類があった。



藤ノ木古墳石室



金銅装透彫鞍金具



金銅製冠

法隆寺の北方山麓に6世紀末頃の造営である仏塚古墳ほとけづか（県史跡）がある。斑鳩宮があったと推定されている地域を臨むことができる選地が行われていることや、聖徳太子の斑鳩への進出と時期が近似していることから、藤ノ木古墳と同様にその被葬者については、聖徳太子自身は少なくとも被葬者を認識できていたものと思われ、斑鳩宮を一望できる選地だけに注目される。



仏塚古墳

また、古墳時代ではなく飛鳥時代の古墳となるが、藤ノ木古墳の西方の「御廟山」と呼称されていた丘陵にあった御坊山古墳群は、昭和40年(1965)の造成工事等により消滅したが、特に御坊山3号墳より出土した重要文化財の三彩有蓋円面硯やガラス製管や琥珀製枕等は、当時としても貴重な副葬品であり、造営年代が7世紀中頃と推測されていることから、その被葬者は上宮王家の一族ともいわれている。その丘陵東端に位置する甲塚古墳は、詳細は不明であるが御坊山古墳群の中で唯一残された古墳と考えられる貴重な存在である。



3 飛鳥時代

崇峻天皇5年(592)の蘇我^{そが}氏による崇峻天皇暗殺後、推古天皇元年(593)に即位した推古天皇は、同年に甥の聖徳太子(厩戸^{うまやどのおうじ}皇子)を摂政に任じ、中央の政治に参画させた。現在では、飛鳥時代初め頃は、仏教信仰の普及を進める蘇我氏や推古天皇と聖徳太子といった皇族が集団体制で政治を執り行っていたとも考えられている。こうした動きは、蘇我氏による飛鳥寺、聖徳太子による法隆寺や四天王寺など、皇族や豪族に取り入れられ、これまでの古墳の造営に代わって寺院の建立にその権威を見出し、競って寺院の建立が進められた。また、こうした政治体制が飛鳥や斑鳩における仏教信仰の発展に寄与し、古代寺院の造営や仏像の造立などに代表されるような仏教文化が華開いた。

政治の拠点は飛鳥におかれていたが、聖徳太子は、推古天皇9年(601)に斑鳩宮を造営し始め、その4年後には居住し、斑鳩宮と同時に着手した斑鳩寺(法隆寺)は推古天皇15年(607)に建立されたといわれている。その後、推古天皇30年(622)の死去までの約20年間、斑鳩の地は、仏教文化の中心地の一つとなり、この聖徳太子の斑鳩進出により、斑鳩の地は歴史的に一躍脚光を浴びることとなった。

斑鳩町の歴史において最も重要な飛鳥時代においては、発掘調査や文献史料により、かなり様相が明らかとなってきている。特に、聖徳太子が斑鳩において造営したとされる斑鳩宮をはじめとする4つの宮については、これらの宮跡が後世に寺院にあらためられるなど、斑鳩の歴史において重要な位置を占めている。

奈良時代成立とされる『法隆寺東院縁起』によると、荒廃する斑鳩宮を嘆き僧行信^{ぎょうしん}が聖徳太子を偲んで、天平11年(739)頃に夢殿を建立したとある。昭和9年(1934)の法隆寺東院の解体修理工事に伴う発掘調査において、奈良時代の建物より遡る掘立柱建物群や大規模な溝の遺構が検出された。また、『日本書紀』(養老4年(720)成立)に皇極天皇2年(643)に焼失したと記載されているとおりに火災の痕跡が確認されたことなどから、伝承どおり現在の法隆寺東院は斑鳩宮跡に建立されたことが確認されている。

岡本宮は、『日本書紀』によれば、推古天皇14年(606)に推古天皇に対して聖徳太子が法華経を講じた宮であり、その宮は飛鳥岡本宮の地であると考えられたこともあった。しかし、境内及びその周辺における発掘調査において、斑鳩宮や若草伽藍跡と同様の「斑鳩条里」と呼ば

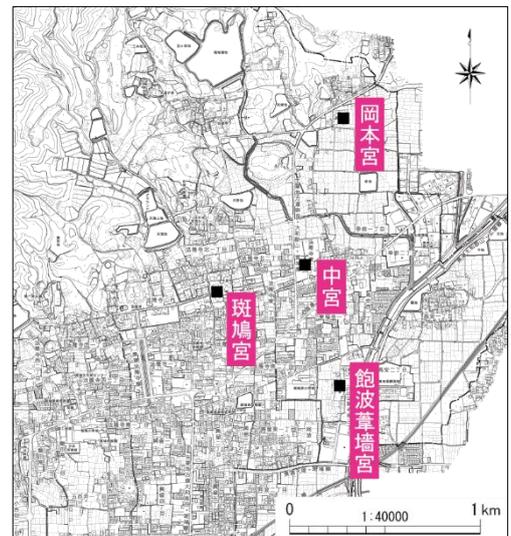


図1-14 聖徳太子ゆかりの4つの宮

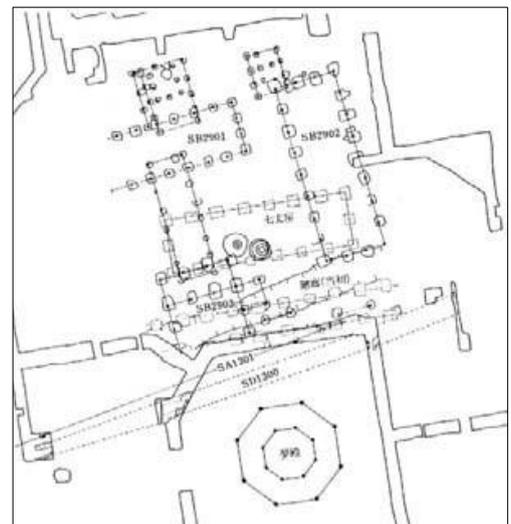


図1-15 斑鳩宮跡の掘立柱建物群遺構図

れる北から西に約20度偏向する方位をもつ掘立柱建物や特殊な井戸や石組溝や道の側溝などの下層遺構が確認された。このことから、『聖徳太子伝私記』（重要文化財、顕真撰、嘉禎4年(1238)成立)の「法起寺塔露盤銘逸文」に記されている聖徳太子の遺言により岡本宮を寺としたのが法起寺であるとする伝承の蓋然性が高まっている。

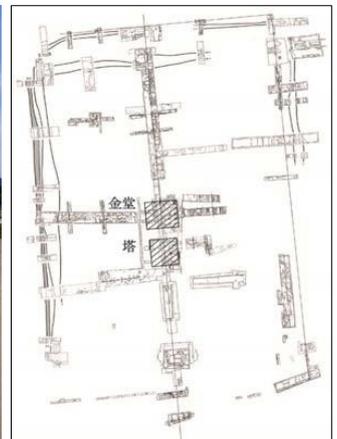
飽波葦^{あくなみあしがきのみや}牆宮は聖徳太子が晩年を過ごし、死去された宮と伝えられている。平成3年(1991)に発掘調査が実施され、飽波葦牆宮跡と伝承される成福寺付近は「上宮遺跡」と名付けられた。こうした発掘調査において、明確な建物跡は検出されないものの、成福寺の西側等での発掘調査では、7世紀前半頃の土器がまとめて出土した井戸跡が検出されたほか、飛鳥時代の素弁^{そへん}八弁蓮華文軒丸瓦^{はちべんれんげもんのみまるがわら}や手彫り忍冬^{すいかすら}唐草文軒平瓦など法隆寺若草伽藍跡出土の瓦類と同じ種類の瓦や焼けた凝灰岩製切石などの仏教的建物の存在を推測させる遺物がまとめて出土していることから、上宮遺跡が飽波葦牆宮である蓋然性が高い。なお、後述するように、飛鳥時代の遺構は奈良時代に飽波宮(飽波葦牆宮とは異なる。26頁参照)が造営された際に削平された可能性が高い。

現在は法隆寺東院の東側に境内を構えている中宮寺については、聖徳太子建立の七ヶ寺の一つの中宮尼寺であり、その創建の地とされる中宮寺跡(史跡)は、一説に聖徳太子の母である穴穂部間人皇后の宮(中宮)を寺としたとする説や斑鳩宮と岡本宮と飽波葦牆宮の真ん中の位置に造られた宮とする説など諸説ある。しかし、飛鳥時代の明確な宮殿遺構は発掘調査で検出されていないものの、法隆寺若草伽藍跡と同じ四天王寺式伽藍配置を採用していたと考えられていて、現在でも塔と金堂の基壇が残っている。出土瓦には飛鳥時代前期から中期の軒丸瓦が出土していることから、

聖徳太子建立の尼寺として発願され、法隆寺に比較してゆっくりと造寺活動がなされたと推定される。このように聖徳太子の残した仏教的世界観は、その後の斑鳩の歴史に強い影響を与えることとなった。



中宮寺跡 塔・金堂基壇(整備後)

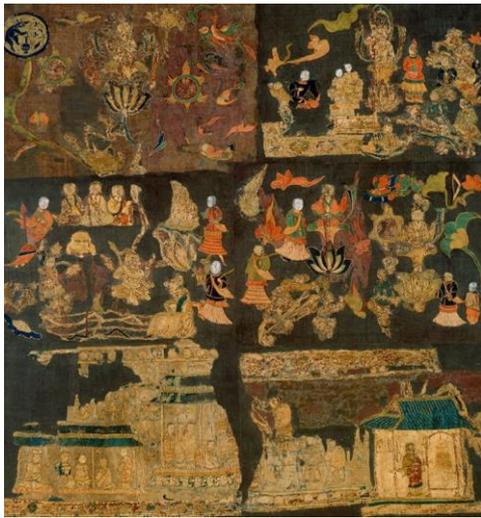


中宮寺跡寺域復元図

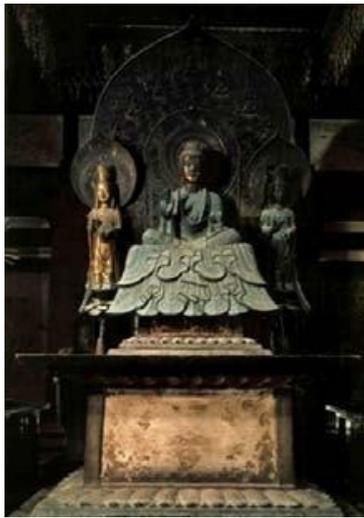
中宮寺にあったと伝わる天寿国^{てんじゅこく}繡帳^{しゅうちやう}残闕^{ざんけつ}(国宝)は、聖徳太子の死後、その妃の一人の橘^{たちばな}大^お郎^{いらつめ}女が聖徳太子の死後の世界を刺繡によって表したものとされており、飛鳥時代の貴重な絵画資料となっている。

また、法隆寺金堂の本尊である釈迦三尊像(国宝)は、止利仏師により聖徳太子の死後にその姿を写して製作されたといわれており、夢殿本尊となっている救世観音菩薩像(国宝)も聖徳太子の生き写しといわれている。

聖徳太子の長子であった山背^{やましろ}大^お兄^え王^{のおう}は、法輪寺や法起寺の造営に着手し、斑鳩においてより一層の仏教世界の具現化を推し進めた。しかし、田村皇子(のちの舒明天皇)との皇位継承



天寿国繡帳残闕



釈迦三尊像



救世観音菩薩像

争いなどを経て、皇極天皇2年(643)に蘇我入鹿の派遣した軍勢によって上宮王家が滅亡したことにより、斑鳩の地は歴史の表舞台から姿を消すことになった。町内にはこうした上宮王家にまつわる文化財が多く点在している。なお、法輪寺と法起寺のほぼ中間にある独立丘陵の岡ノ原の頂部に所在する古墳は、宮内庁により山背大兄王の墓として富郷陵墓参考地に指定され、現在治定されている。

法輪寺は別名三井寺とも呼ばれているが、これは現境内の北西方向にある飛鳥時代の瓦製品を積み上げて造られている特別な井戸(御井)である三井(史跡)が、この地域において重要な井戸であったことから地名が成立したものと考えられる。堂塔の配置は法隆寺式伽藍配置を踏襲しており、法隆寺の3分の2程の規模である。発掘調査では7世紀前半頃の船橋廃寺式と素弁八弁蓮華文軒丸瓦そ べんはちべんれんげもんのみまるとがわらと重弧文軒平瓦じゅうこもんのみひらがわらの一对と、7世紀後半頃の法隆寺式と呼ばれる複弁八弁蓮華文軒丸瓦はちべんれんげもんのみまるとがわらと均整唐草文軒平瓦きんせいからくさもんのみひらがわらを一对とする軒瓦が出土している。法輪寺は、『聖徳太子伝私記』

(暦仁元年(1238)成立)にある聖徳太子の病氣平癒祈願のために山背大兄王と由義王らが建立したという縁起と、『上宮聖徳太子伝補闕記』(平安時代初期成立)にある斑鳩寺罹災後に百濟聞師、円明師、下氷君雑物ら3人が建立したという縁起があるが、その前者は岡本尼寺(法起寺)に対する僧寺として発願された寺と解されている。なお、法輪寺と法起寺とのほぼ中間に所在する三井瓦窯跡(史跡)は、法起寺西側の尾根丘陵に立地する瓦塚2号墳後円部の西側斜面にあり、窯内からは7世紀後半頃の丸瓦と平瓦が出土して



三井(井戸)

素弁八弁蓮華文軒丸瓦と
四重弧文軒平瓦

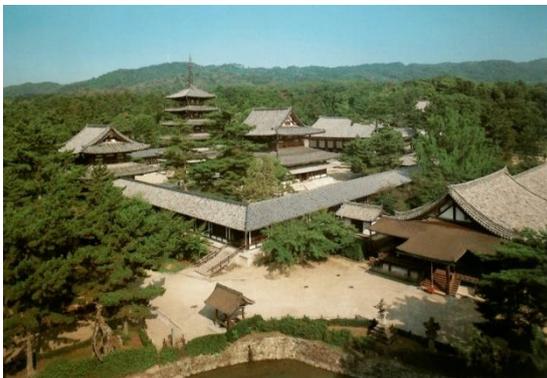


再建事業が進み、少なくとも金堂の完成を終えていたことを示すものである。比較的早く法隆寺西院伽藍の再建が始まった要因は、聖徳太子信仰の萌芽ともいえる聖徳太子追善の寺としての再建に対する意欲や地域の活動であった。なお、現在も続けられている^{げあんご}夏安居における仁王般若経や最勝王経の講義は天武天皇14年(685)から始まったといわれている。こうした日本が律令国家へと歩んでいる天武・持統朝における幡など多くの奉納品は、この時期に天皇をはじめ多くの人々による法隆寺に対する信仰があったことを示しており、平安時代に盛んとなる太子信仰に結びつく動きと解される。

4 奈良時代

和銅3年(710)に、都が藤原京から平城京へ移されて奈良時代を迎えると、飛鳥地域のいくつかの寺院が平城京に移り新たに建立したのに対して、斑鳩地域の聖徳太子ゆかりの寺院は移ることはなかった。奈良時代の仏教は、国家の保護を受けてさらに大きく発展し、特に鎮護国家の思想のもと、聖武天皇による国分寺・国分尼寺の建設や東大寺の大仏造立などの仏教に関する大事業も行われ、平城京には寺院が建ち並ぶことになった。こうした状況において、法隆寺は薬師寺・大安寺・元興寺・興福寺・東大寺・西大寺の六ヶ寺と合わせて南都七大寺といわれ、国家的大寺として天皇をはじめ多くの人々の信仰を集めた。法隆寺は聖徳太子ゆかりの斑鳩にある寺院として、その後の斑鳩の都市形成は法隆寺を中心として発展していくこととなった。

法隆寺の西院伽藍の完成については、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（天平19年(747)成立）によれば、^{ちゅうもん}中門の仁王像の完成や五重塔初層の塑像群が、和銅4年(711)の製作とあることから、少なくとも和銅年間(708~715)には、金堂や塔などの西院伽藍の主要建造物が完成していたと考えられている。一方、『法隆寺東院縁起』（鎌倉時代にまとめたと推定）によれば、行信は斑鳩宮跡が荒廃しているのを嘆き、後に孝謙天皇となる皇太子阿倍内親王に奏上して、聖徳太子を供養する寺として、天平11年(739)に八角円堂の夢殿や橋夫人（^{あがたいぬかいのみちよ}景大養三千代：奈良時代の女官。光明皇后の母）の住宅を移したと伝えられる伝法堂等の建物を擁した上宮王院が建立された。



法隆寺西院伽藍



法隆寺東院伽藍

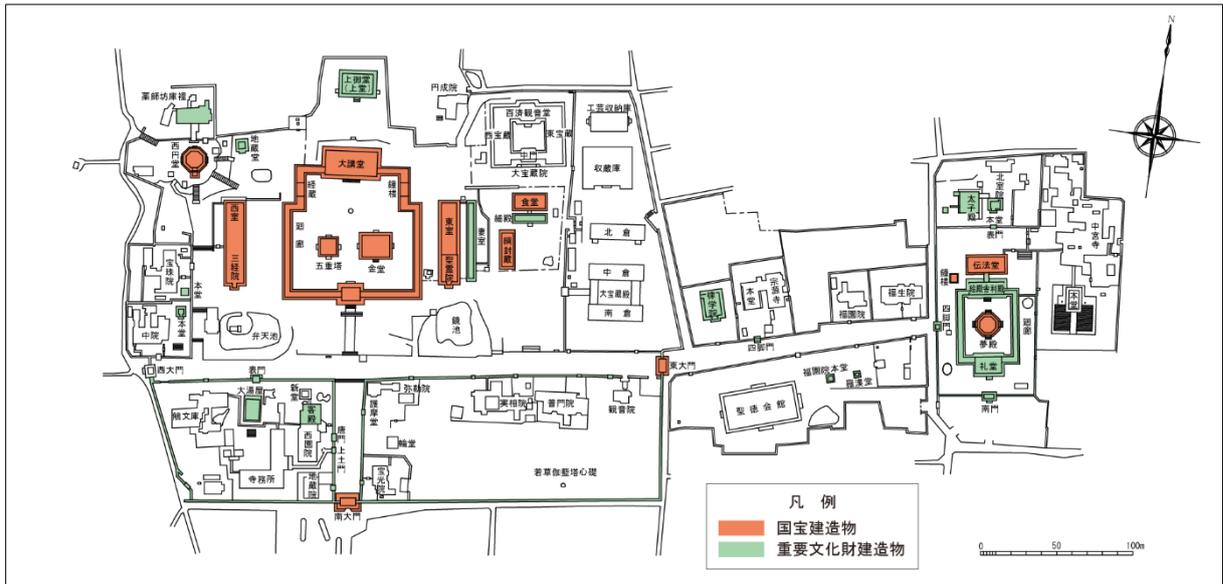


図1-17 法隆寺伽藍配置図

法隆寺における幾つかの仏会は奈良時代に起源をもつと考えられている。その一つは、^{しょう}聖霊会（お会式）で、室町時代に成立した『寺要日記』（宝徳元年(1449)成立）によると、法隆寺東院の夢殿では、天平20年(748)から聖徳太子の追善供養の法要として、聖徳太子の命日に行う聖霊会が始まったとある。また神護景雲2年(768)には勅命により国家安隠、万民豊楽、寺門興隆の祈願を目的とした^{きちょうげか}吉祥悔過（修正会）が始まり、『寺要日記』には同年、法隆寺講堂で初めて吉祥悔過の法要が行われたと記されている。そして宝亀元年(770)に恵美押勝の乱平定後に造られた百万塔は、法隆寺にも納められた。



百万塔

また、称徳天皇は、神護景雲元年(767)に河内への行幸の途中に法隆寺に参詣して、飽波宮に止宿し、また神護景雲3年(769)にこの行宮を利用したことが『続日本紀』（延暦16年(797)成立）にある。この飽波宮と考えられているのが、平成3年度(1991)に発掘調査が実施された上宮遺跡である。調査の結果、主殿と解される東西7間、南北5間に南北両面に庇がつく大型の建物や脇殿と解される南北棟の建物が整然と配置されていた。また、平城宮や平城京より出土する軒瓦と^{どうはん}同範の瓦が出土し、宮域の西限と推定されていたところの西側の溝からは、年号は不明ながら荷札と思われる日付の記されている木簡が出土したことなどから、この上宮遺跡が飽波宮である蓋然性は高い。

大宝元年(701)の大宝律令、養老2年(718)の養老律令の完成を経て、公地公民の理念に基づく班田収授法が成立したと考えられる。これにより人民を戸籍・計帳に登録する統一的な規格による条里制地割りが全国的に施行されたといわれている。そしてその後の長屋王による百万町歩開墾計画、聖武天皇による三世一身法や墾田永年私財法といった農業施策を経て、斑鳩においても、法隆寺をはじめ興福寺や東大寺といった南都の大寺院の荘園（寺田）が拡大して



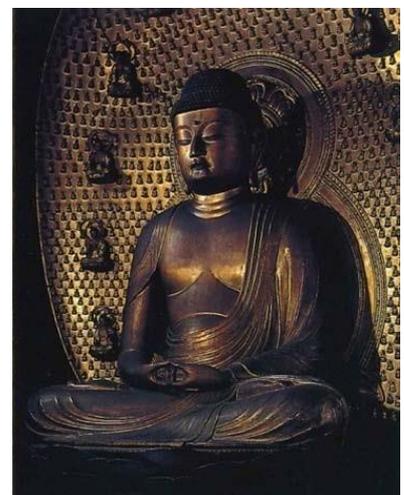
いった。こうした条里制の名残りは、現在も町の南部を中心とした水田の区画において確認することができる。北方の矢田丘陵を背にして、東方の富雄川、南方の大和川、西方の竜田川に囲まれたコの字状の地形において、平群郡の6条から11条（北から南）7里から12里（東から西）へ渡って施行されたと推定されている。

5 平安時代

延暦3年(784)に平城京から長岡京に遷都、延暦13年(794)に平安京に遷都して、以後400年間にわたり、国政の中心が奈良から京都に移った。桓武天皇は、遷都にあたり南都の大寺院を長岡京や平安京に移転することを認めず、南都仏教の勢力を抑止するとともに、従来の国家仏教とは異なる新しい仏教を志向する動きが生まれた。そして平安時代には、唐から新たに伝えられた天台宗や真言宗といった密教仏教とともに、本地垂迹説や御霊会など神仏習合の動きや、現世での利益追求から浄土往生を求める浄土信仰などが広まった。

『法隆寺東院縁起』（鎌倉時代にまとめられたと推定）によると、法隆寺では貞観元年(859)に、道詮（797～876：武蔵国に生まれる。聖徳太子の遺徳を慕い40年間にわたり法隆寺西院三経院で精進）が、私田7町4反を法隆寺東院に施入して、東院の荒廃を奏上して夢殿を修理したとある。また、天慶年間(938～947)に法隆寺別当の湛照が、菅原道真を祀る天満宮として斑鳩神社を創建するなど時代を背景とする動きがみられた。奈良街道沿いの龍田神社においても、法隆寺の別当坊を神社に置いて法会を勧修し、神仏習合の流れの中で、神社に隣接して神宮寺が建立された。

小吉田の吉田寺は、『恵心院源信僧都行実』（恕哲著、享保3年(1718)成立）によれば、永延2年(988)に天台宗の恵心僧都がこの地に来遊して創建されたとされる。また、本尊の阿弥陀如来坐像（重要文化財）も、安らかに極楽往生された御母堂の追善供養と末世衆生救済のために、恵心僧都が造顕されたと伝えられている。なお、この本尊に祈禱を受けた肌着を着用すると「延年天寿を授かり、腰下の世話をかけずに安楽往生できる」という伝承が生まれ、シモの世話にならないようにと、肌着を持って御祈禱を受けに来る人々も多く、吉田寺は、別名「ぽっくり往生の寺」と呼ばれている。



吉田寺阿弥陀如来坐像

平安時代は、貴族や社寺の領有地である荘園が数多く設置されるようになった。大和では興福寺の勢力が拡大し、延長年間(923～931)以降、法隆寺の別当(寺務を総括する長官に相当する僧職)には、興福寺の僧が就任することが多くなった。そして11世紀中頃には、法隆寺は興福寺の支配を受け、斑鳩における法隆寺荘園も縮小していった。

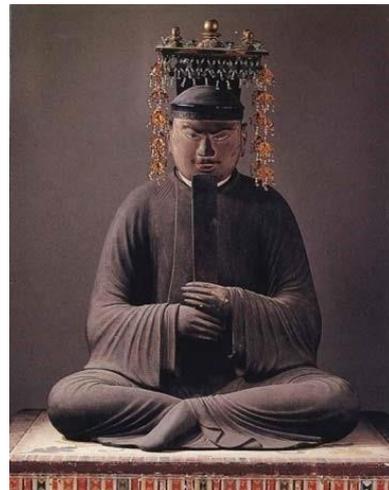
一方、法隆寺では太子信仰の高まりがみられるようになり、平安時代後期以降、数多くの聖徳太子像や聖徳太子画像などが製作され、聖徳太子の命日に行われる法会である聖霊会が盛んになるとともに、寺院の拡大改修も行われた。治安3年(1023)には、藤原道長が法隆寺及び

上宮王院を参詣している。また、長元4年(1031)には寺域を拡張し、南大門を現在位置に移転している。なお、この南大門は、永享7年(1435)に学侶と堂衆の対立により焼失するが、永享10年(1438)に再建された。

治歴5年(1069)には、仏師円快が彫刻し、絵師秦致貞が彩色を施した現存最古の聖徳太子坐像である聖徳太子七歳像（重要文化財）が造られ、延久元年(1069)に、上宮王院絵殿内では、絵師秦致貞による聖徳太子絵伝（現在は法隆寺献納宝物として東京国立博物館に所蔵）が描かれた。そして、この像を本尊として聖徳太子450回忌にあたる延久3年(1071)頃から



聖徳太子七歳像



聖徳太子坐像

「聖霊会」という名前で法会が行われたと伝えられる。

保安2年(1121)には、東室（^{ひがしむろ}国宝）の前面を改装して、太子の壮年期の姿を表したものと伝えられる聖徳太子坐像（国宝）を安置する聖^{しやうりやういん}霊院（国宝）が造られ、保安3年(1122)に聖徳太子500回忌が行われた。大治元年(1126)には、西室（国宝）の前面を改装して『勝鬘^{しやうまん}経』『維摩^{いまいま}経』『法華経』の三経を講演する道場とする三経院（国宝）が造られた。



聖霊院



三経院

6 鎌倉・南北朝・室町時代

文治元年(1185)に平氏が壇ノ浦の戦いに敗れ、建久3年(1192)に源頼朝が征夷大將軍となった鎌倉時代には、平安時代後期から高まった太子信仰はますます盛んとなる。聖霊会に使用する行道面のほとんどは、保延4年(1138)に製作されており、正治元年(1199)には源頼朝によって聖霊会の幟・舞台・舞楽面の寄進が行われるなど、盛り上がりを見せることになり、弘安7年(1284)には聖霊院が大改修されている。

室町時代の応永元年(1394)から天正末までの200年間に、聖霊会は実に131回記録されており、この時期にその内容も洗練され、大会式・小会式の方法も確立したと考えられる。



西円堂

西円堂
薬師如来坐像

鬼追式

西院の境内北西の小高い丘に位置し、橘夫人の発願により行基が創建したと伝えられる西円堂（国宝）は、永承5年(1050)に倒壊するが、建長元年(1249)に再建している。

薬師如来坐像（国宝）を本尊とする西円堂では、弘長元年(1261)から西円堂修二会（薬師悔過）と、その結願の後の法楽として鬼追式（追儺会）が始まった。

西円堂は「峯の薬師」とも呼ばれ、本尊薬師如来の霊験に対して多くの庶民の信仰を集め、この薬師如来に五体患いの願かけから無病息災・延命長寿など、健康に関わる願かけをして、男性は武器や武具、女性は銅鏡・櫛・小袖などを奉納した。明治5年(1872)の調査では刀剣6700余本、鏡6000余面があったとされる。

また、『法隆寺別当記』（南北朝一室町時代成立）によれば、弘長元年(1261)の後嵯峨上皇の行幸の際に「東西郷民左右二植松ヲ」とあり、南大門参道（松の馬場）の松が郷民の協力で植えられたことが記されており、民間信仰の高まりとともに、法隆寺を支える郷民の姿を読み取ることができる。

律令制の崩壊につれて12世紀頃から、荘園内に郷村的集落が発生する。この時期は農業の生産性が向上し、作物の収穫の増大に伴い余剰品や特産物が生まれ、さらに手工業品などが商品化し、集落では商人や市が生まれていった。

寛元元年(1243)には、龍田神社本殿の西側に市場の繁栄を祈るため、摂津の西宮神社より恵比須神(戎さん)を勧請した。この際、法隆寺の西郷・東郷の郷民が入替わり立ち替わり白人猿楽を演じて奉仕したとあり、商売繁盛の神として西宮の戎さんを迎えて、ここに龍田市が誕生した。『嘉元記』（重要文化財、東京国立博物館蔵『1996法隆寺献納宝物』、南北朝時代成立）には、中世の法隆寺支配の市として弘安10年(1287)に龍田市の名がみえる。当時の南都・興福寺に発生した市場に比べても、屈指の市場であったようで、龍田市は西大和で大いに賑わったと伝えられる。



南大門参道（松の馬場）



龍田神社

平安時代に発生した猿楽と田楽は、法隆寺の諸行事でも盛んに演じられた。法隆寺の例年法楽や龍田神社の神事祭礼には坂戸座による猿楽が演じられ、郷民にも親しまれ、郷民もまた白人猿楽を盛んに演じたとされる。元応2年(1320)には、坂戸座の袈裟大夫に楽頭職を与え専属としている。このほか中世の芸能として延年・風流・白拍子など多くの種目が盛んに演じられた。



金剛流発祥の地碑

猿楽・田楽は鎌倉時代から南北朝にかけての歌舞劇であり、能や狂言に展開していくが、この坂戸座は大和四座の一つとなり、後の金剛流（能楽）に発展したと考えられている。

7 安土・桃山～江戸時代

天正元年(1573)に織田信長は將軍足利義昭を追放し、室町幕府は滅亡する。そして信長は天正4年(1576)に筒井順慶に大和守護職を命じ、斑鳩地域は筒井順慶の支配下に置かれることになる。

天正10年(1582)の本能寺の変によって、秀吉の時代に代わるとその家臣となり、所領も安堵された。天正12年(1584)に郡山城主筒井順慶が没し、子の定次が継ぐが、翌年伊賀国上野に転封され、秀吉の弟秀長が郡山城主となる。天正15年(1587)に秀吉の命により建立されたといわれている石標「下馬」が、法輪寺の山門前に現在も残っている。

豊臣秀吉は、全国で「太閤検地」といわれる検地を行うが、大和でも文禄4年(1595)に検地が行われた。このとき、法隆寺はその寺領を1千石とされた。

慶長3年(1598)に豊臣秀吉が亡くなると、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにより徳川家康が実権を握ることになる。慶長6年(1601)に、片桐且元^{かつもと}は平群郡内の斑鳩地域を含む55力村・2万4千407余石を拝領し、龍田村に陣屋を構え、慶長20年(1615)の大坂夏の陣後は加増されて4万石の大名となるが、同年に逝去した。その後、明暦元年(1655)に4代片桐為次が没して後継がなかったことから廃藩となり、50余年続いた龍田城下町としての姿は終わった。その後、斑鳩地域は、近隣の大名が預かることもあったが、幕府直轄領として代官によって支配されることになった。

慶長5年(1600)から慶長11年(1606)にかけて、法隆寺では秀吉供養の一環として、豊臣秀頼寄進による法隆寺伽藍の大修理が行われる。このときの作事奉行は片桐且元が勤め、法隆寺大工棟梁には西里出身の中井大和守正清が勤めた。

慶長19年(1614)に、家康は大坂冬の陣に赴く途上、法隆寺阿弥陀院に止宿している。翌慶長20年(1615)には大坂方が西里の中井正清の屋敷に火をか



中井大和守正清像



けて西里集落は全焼したが、幸い火は法隆寺西門の前で防がれ、法隆寺に被害はなかったとされる。

中井正清の父正吉は、法隆寺大工棟梁で四姓番匠の一つ中村家より技術を学び、京都方広寺大仏殿の建立に際しては棟梁司に任じられ、大工集団の指導的役割を果たしている。永禄8年(1565)に法隆寺西里で生まれた正清は、天正16年(1588)に24歳で家康に召し抱えられ、伏見城、二条城、知恩院の作事の大工棟梁として参加し、法隆寺伽藍大修理の後も、江戸城や増上寺の造営に従事するなど、徳川家康に重用された。

こうしたことから、中井正清は、五畿内と近江を合わせて6ヶ国の大工棟梁を支配することとなり、中井家は京都に中井役所を構えたことにより、法隆寺村の大工の棟梁家も京都へ移る者がいた。元禄5年(1692)には、中井家は6か国の大工6,677人を率いていたとされるが、この棟梁集団は次のような構成になっていた。御扶持人棟梁3人はいずれも中世以来の京都大工であるが、それに次ぐ頭棟梁5人のうち4人が法隆寺大工で、そのうち2人は在京、2人は西里に居住。次いで並棟梁89人のうち法隆寺大工が46人(西里35人、東里11人)と半数以上を占めており、そのうち16人が在京、法隆寺に残っている棟梁は30人であった。

西里をはじめとする法隆寺村の大工集団は、法隆寺をはじめ、大和国や京における寺社や御所の作事に携わることで、大工技術を伝承してきたが、専門大工となる者は京都に移り、残った者は農家をしつつ法隆寺の修理・修繕を担ってきた。江戸時代中期の元文2年(1737)には、大工棟梁11名・仕手大工(平大工)35名を数えたといわれる。なお、法隆寺村には大工棟梁や大工のほかにも、^{そま} 杣(植林して材木を切り出すきこり)・^{こびき} 木挽(材木を大鋸で切る人)など数多くの職人たちもいた。

こうした大工棟梁家である安田家は、西里を代表する大工棟梁家の一つであり、空兵衛と武太夫の2つの系統に分かれながらも、元禄5年(1692)頃までは西里に居住していたとされる。その後、空兵衛家は京都に移住し、武太夫家が西里に残った。そして幕末には、法隆寺村に残っている棟梁家は、長谷川伊太夫家と安田武太夫家の2つとなり、さらに明治維新の際には安田武太夫家だけになった。法隆寺の伽藍や子院の建物の維持には慶長の大修理以後も、元禄の大修理はじめ、恒常的な修繕が必要であり、これを担ったのが法隆寺村に残った大工棟梁安田武太夫家をはじめとした大工たちであった。また、江戸時代後半に、法隆寺大工の信仰の拠点となる修南院太夫座を守っていたのも安田家であった。

修南院(東林寺)は、文明7年(1475)に法隆寺大工がその職業神である聖徳太子を祀るために一味同心して、太子堂を東院の東に建立したのが始まりといわれ、法隆寺の末寺に位置付けられていた。修南院は、法隆寺大工によって構成されていた太夫座によって維持されており、太夫座の上席10人のうち一老の者が住職となった。江戸時代末頃になると、安田家が棟梁惣代として修南院を預かり、住職を勤めていたが、明治6年(1873)に廃寺となった。

中世に興隆した太子信仰は、江戸時代中期以降、急速に庶民生活に浸透していった。太子信仰は特に大工・左官・石工といった職人たちの間で盛んになり、太子講と呼ばれる組織が各地で結成された。法隆寺の中でも聖霊院・舍利殿が多くの人気の集め、四季を通じて賑わいをみせた。こうした参拝者たちの要望に応え、聖徳太子の御影や法隆寺境内の絵図などが

作製された。それにより太子講をはじめとする多くの人々からの布施も集まり、それが法隆寺の経営を支えることとなった。このような多くの人々の太子信仰に支えられて、聖霊会も続けられてきた。

法隆寺の寺領1千石は、江戸時代にも踏襲されたが、伽藍の修復費用には十分とはいえないことから、浄財を集める活動も行われることになった。元禄3年(1690)に、古くからも神聖な建物として門戸を固く閉ざしていた金堂の南正面を初めて開扉するなど、夢殿の内陣や聖霊院も公開した。これらの開帳が成功したこともあって、その4年後の元禄7年(1694)には、江戸本所回向院において出開帳でがいちょうを行った。このときの『江戸開帳之記』(法隆寺蔵、文化年間(1804~1818)成立とされる)には、「當寺伽藍之修理は寺家の貧乏之力を以ては其の功を成し難し。然れば則ち靈佛靈寶を江戸に持参せしめ開帳致し其の散銭を以て修理せしめ然るべく之旨群議決定せしめ、此の趣を南都御奉行所に申さしめ、赦免に於いては江戸寺社御奉行所に参入せしめ訴えるべく之旨一決畢ぬ。」と記され、出開帳が建物の修理費を捻出する目的であることがわかる。

この出開帳は大成功を収め、5代将軍綱吉や生母桂昌院の上覧があり、多額の寄進を受け、これらの資金を持って伽藍の大修理が行われた。さらに、元禄9年(1696)大坂四天王寺でも出開帳を行い、道頓堀では岩井半四郎による「法隆寺開帳」の芝居興行も行われたとされている。出開帳は、寺社の建物修理費の捻出とともに、本来の仏教や太子信仰の普及にも結びついてきた。なお、宝永4年(1707)には、桂昌院の寄進で、中宮寺に石高46石余りの朱印地が与えられた。

江戸時代は、新田開発や治水灌漑技術の進歩、さらに農具や稲品種の改良、金肥の使用等により、農業生産力の飛躍的発展がみられた時代でもある。龍田藩時代の慶長8年(1603)から慶安3年(1650)までに、法隆寺村に5か所、三井村に13か所、興留村に2か所の溜池の築造や竜田川の改修などの灌漑事業が行われている。農村では戸数・人口が増加した。

17世紀中頃から商品作物として、多彩な農業生産(米・麦・大豆・小豆・煙草・木綿・菜種等)が行われるようになった。なかでも木綿は大和で盛んに作付けの行われた換金商品であった。これらの商品は大阪に運ぶ一方で、龍田において酒・繰綿・油に加工され、各地に販売され、安永2年(1773)には、龍田村で絞油屋は12軒を数え、油粕を肥料としても販売していた。

寛政12年(1800)には、龍田村大字龍田で屋号のある商店は121軒に及んだとされ、この中で借家は14軒、文化3年(1806)には24軒に増え、賃貸業も成立していることがわかる。嘉永4年(1851)には酒屋が3軒あったとされる。奈良街道は、このように龍田市や宿場町としての賑わいととともに、江戸時代には、お伊勢



昭和41年(1966)頃の奈良街道

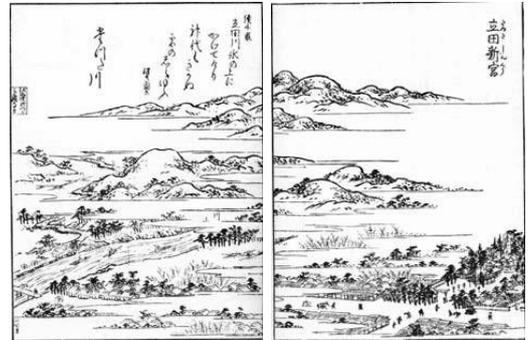


太神宮灯籠



参りをする旅人の往来も活発化した。特に、伊勢神宮の20年ごとの式年遷宮の翌年は、そのご利益を貰うためのお陰参りが流行り、天保元年(1830)のお陰参りの規模が最も大きかったと伝えられている。伊勢神宮への信仰は昔からあったが江戸時代中期に大和を中心に太神宮灯籠という形で表れ、村の鎮守社の境内や村外れの道端に大型の灯籠が立てられた。現在町内でわかっているもので、10基の太神宮灯籠が確認されている。

龍田村については、『大和名所図会』（秋里舜福著、寛政3年(1791)成立）に、「法隆寺より六七町^{ひつじさる}坤にあり。民家軒をつらねて、龍田町といふ。」「龍田の町を西へ出づれば川あり、是龍田川なり……龍田山・龍田川の和歌、二十一代集の内百二十一首あり」とあり、龍田神社から竜田川が江戸時代後期には賑わいと行楽の名所であったことが記されている。



立田新宮『大和名所図会』寛政3年(1791)

8 近代・現代

明治4年(1871)の廃藩置県によって大和国全体が奈良県となり、明治22年(1889)の市町村制の実施を受け、平群郡の斑鳩地域は3つの村（龍田村・法隆寺村・富郷村）に設定された。

明治元年(1868)の神仏分離令によって寺院に対する廃仏毀釈運動がおこり、寺院に大きな影響を及ぼすことになった。法隆寺においても境内から斑鳩神社へ地主神ほかを遷座し、祭祀や管理も村民に移譲され、村民が「天満さん」と親しく呼ぶ法隆寺村の鎮守社になった。

こうした中、法隆寺は1千石の寺領を没収されたことでかつてない経済的危機を迎え、年中行事のほとんどが中断せざるを得ない事態となり、寺を維持していくために、明治11年(1878)に、法隆寺は寺宝の一部を一括して皇室に献上し、下賜金1万円を賜った。この動きは、貴重な寺宝の散逸をおそれ、文化財の保存を願うというのが皇室への宝物献上願いに書かれた理由でもあった。その後これらの寺宝は、戦後に皇室から国に移管され、東京国立博物館の法隆寺宝物館に納められ、公開されている。

一方、法隆寺が内外に文化財としての高い評価を得る大きなきっかけとなったのが、明治17年(1884)にフェノロサと岡倉天心らによる、秘仏とされてきた夢殿の本尊である救世観音菩薩像（国宝）の開扉であった。その後、明治30年(1897)には、「古社寺保存法」が施行された。これに基づき法隆寺金堂などの文化財が国宝・特別保護建造物に指定され、国の支援によって伽藍の修理が進められるようになった。

法隆寺は明治6年(1873)から真言宗の所轄を受けていたが、明治15年(1882)に法相宗として独立し、法相教学の研鑽道場として明治26年(1893)に法隆寺勸学院が設立された。そして、明治29年(1896)に慈恩会が復興し、さらに明治36年(1903)に夏安居が三経院において復興するとともに、年中行事が徐々に復興されていった。明治44年(1911)には太陰太陽暦で行われていた金堂修正会などが太陽暦に改められ、お会式も1カ月遅れの3月22日から24日

までの3日間に行われることになった。そして大正10年(1921)には、聖徳太子1300年御忌としての聖霊会が盛大に行われた。

昭和4年(1929)には、「古社寺保存法」に代わり「国宝保存法」が制定され、昭和9年(1934)から法隆寺の「昭和の大修理」に着手することとなった。また、昭和14年(1939)には、法隆寺若草伽藍跡の発掘調査が行われ、創建時の法隆寺は金堂と塔が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置によるものであり、現在の法隆寺西院伽藍は再建されたものであることが明らかとなった。そして、昭和15年(1940)から、金堂壁画の模写が始まったが、第2次世界大戦により一時中断することとなった。

近代には、優れた風光と法隆寺を中心とする古寺のたたずまいのゆえに、斑鳩の地に触れた文学作品が多く創られた。明治40年(1907)には、法隆寺夢殿の南門前の大黒屋という旅館に泊まって、高浜虚子が『斑鳩物語』を執筆し、和辻哲郎は自ら斑鳩の地を旅して、大正8年(1919)に『古寺巡礼』を著わした。また、詩においては薄田泣菫や三木露風など、数多くの文人が斑鳩にまつわる作品を発表している。

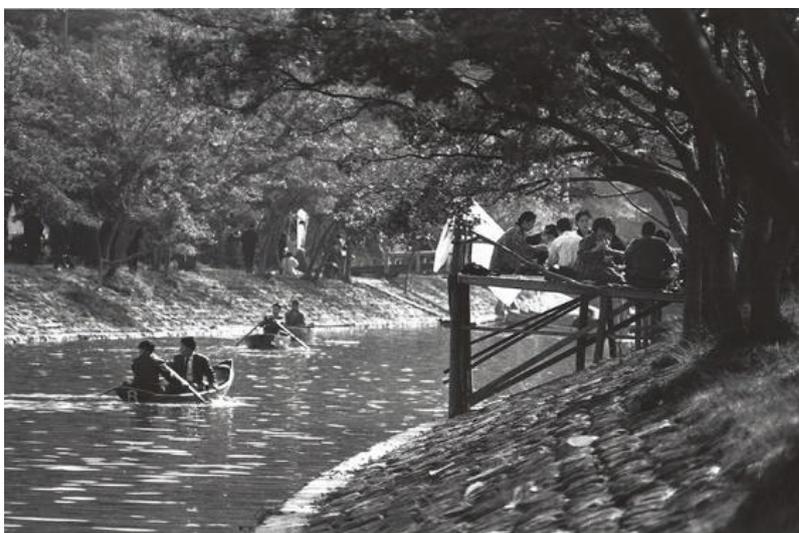
特に會津八一は、奈良の美術や歴史に対しても研究を深め、「法隆寺再建非再建論争」に関連して「法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究」を発表した。歌人でもある會津八一は、しゅうそう秋艸どうじん道人と号して、斑鳩の古寺や仏像を詠った作品を数多く残しており、町内では法隆寺境内(2



『聖霊会行列図』大正10年(1921)



昭和40年(1965)頃の大黒屋



昭和37年(1962)頃の竜田川の行楽



から風呂
『岩波写真文庫』昭和25(1950)年発行



基)、法輪寺境内、中宮寺境内、法隆寺iセンター、上宮遺跡公園の5か所に自筆の歌碑が建立されている。また、俳句では「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」と詠った正岡子規の句が有名である。

このような法隆寺門前の賑わいと、龍田神社を中心とした沿道の賑わいは、明治時代以降も続き、竜田川の風光明媚も幸いして、河岸は行楽地としても賑わいをみせた。竜田大橋周辺には金波楼をはじめとする料理旅館が建ち並び、川にはボートが浮かび、紅葉狩りの宴会が盛況な風景は戦前まで続いた。また、法隆寺西円堂の薬師信仰も多くの人を集め、法隆寺の西大門の北西にはから風呂（サウナ）もでき、峯の薬師信仰とともに、地元の年寄りだけでなく遠くから弁当を持って入りに来る人もたくさんあり、昭和30年代頃まで賑わったと伝えられる。

近代になってからの交通事情としては、明治時代中期以降に鉄道が敷設され、人々の移動がより活発となった。明治23年(1890)には、国鉄関西本線（奈良駅～王寺駅）が開通し、法隆寺前駅が設置された。明治25年(1892)には湊町駅～奈良駅間に延伸され、鉄道が重要な交通機関となり、斑鳩町と大阪を繋いだ。また、大正4年(1915)には、天理軽便鉄道が法隆寺前から天理を結ぶ路線として建設され、昭和19年(1944)に廃線となるまで、法隆寺参拝者や天理教信者で駅前には賑わいをみせた。

一方、昭和7年(1932)に新県道が計画され、大阪柏原から大和川沿いの道路は産業道路と呼ばれ、大阪と奈良を結ぶ幹線となった（昭和27年(1952)に国道25号となった）。

このような交通手段の変化と鉄道や道路の整備は、斑鳩の生活環境に大きな変化をもたらした。鉄道網の拡大は、人々を都市に向かわせるとともに、鉄道駅に人々を集めることになり、鉄道駅が広域的交通の要所となった。通過する自動車交通は沿道の姿を変え、古代以降近代に至るまで、人々の往来の要所として繁栄を続けてきた法隆寺前から龍田の街道の中心性は失われていくことになった。

昭和20年(1945)の終戦を迎え、昭和22年(1947)には、奈良県下最初の町村合併（龍田町・法隆寺村・富郷村）により斑鳩町が誕生した。

法隆寺では、昭和24年(1949)に金堂壁画の焼損という傷ましい災害にみまわれたが、昭和27年(1952)に法隆寺五重塔修理落成法要、昭和29年(1954)に法隆寺金堂修理落成法要、昭和43年(1968)に金堂壁画再現開眼供養、昭和60年(1985)に夢殿で昭和の大修理の完成法要が行われ、50年間に及ぶ法隆寺の大修理が完了した。

また、昭和19年(1944)に落雷によって焼失した法輪寺三重塔は、作家の幸田文など数多くの人々の協力と、西里の宮大工の西岡常一棟梁の手により、昭和50年(1975)に再建された。

昭和24年(1949)の法隆寺金堂壁画焼失をきっかけに、昭和25年(1950)に「文化財保護法」が制定され、従前の「国宝保存法」や「史跡名勝天然記念物保存法」などが吸収された。また、昭和41年(1966)には、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」が制定され、



昭和初期の軽便鉄道（新法隆寺駅）

翌年に法隆寺境内と北西の山麓部は「歴史的風土特別保存地区」に指定され、その周辺は「歴史的風土保存区域」に指定された。こうした文化財や歴史的景観を保護する法制度の整備がなされたことにより、斑鳩の里が守られている。

斑鳩町は昭和30年代の初め頃までは積極的に工場を誘致したが、斑鳩の里の歴史的な風土や環境保護の面から、工場地帯の拡張は好ましくないとの反発の声が上がった。こうしたことから、住宅の町へと方針が切り替えられ、法隆寺を中心とした歴史的環境の保全を図り、自然環境を生かしたまちづくりが始まった。その結果、昭和30年代後半から40年代にかけて分譲住宅が急増し、龍田地区や国鉄法隆寺駅周辺等では住宅地造成が盛んに行われ、ベッドタウン化が進んだ。

こうした開発行為に対して、昭和39年(1964)に御坊山古墳群が緊急調査後に消滅した一方、その後学術調査として、昭和50年(1975)に瓦塚古墳群、昭和51年(1976)に仏塚古墳、昭和60年(1985)に藤ノ木古墳などの発掘調査が行われている。なかでも約1400年前の未盗掘の古墳であった藤ノ木古墳は、日本考古学史上、最も重要な調査の一つとなっている。

平成の時代に入ってから、これまでの調査や研究成果などを踏まえて、斑鳩町では遺跡の整備や展示会や講演会の開催などの啓発を行ってきている。

平成3年(1991)には、上宮歴史公園整備事業に伴い、上宮遺跡の発掘調査を実施し、平成6年(1994)からは、毎年9月にその上宮遺跡公園において、金剛流による薪能(観月祭)を開催している。平成5年(1993)には、斑鳩小学校内に歴史民俗資料室を設置し、平成8年(1996)には法隆寺観光自動車駐車場内に法隆寺iセンターを開設した。この施設は近畿圏における第1号の歴史街道案内所であり、西里集落の大和棟民家をモデルにした瓦葺き二階建(延べ床面積:618㎡)の施設で、1階は法隆寺伽藍の模型などを置く観光案内施設で、2階は西里の西岡棟梁が生前使用していた宮大工道具や棟梁の仕事を紹介する展示や多目的ホールからなっている。

そして、平成5年(1993)12月に法隆寺地域の仏教建造物が我が国初の世界文化遺産に登録され、より一層、世界最古の木造建造物を有する法隆寺の歴史的価値が再認識されることとなった。

斑鳩町は農業を中心とする集落から郊外住宅地として変化してきたが、斑鳩町の文化的景観を特徴付けているのは現在も農業であるといえる。北部の矢田丘陵の末端に食い込んだ樹枝状の水田、三井・岡本周辺の丘陵を活用した果樹園、大和川を挟んだ地域の整然たる条里制によるとみられる水田、それとは対照的な龍田から北庄にかけての不規則でしかも狭い水田、小吉田から稲葉・神南にかけての平坦地の果樹園の拡がりなど、四季折々変化する農業の風景と法隆寺の五重塔など仏教建造物が「日本のふるさと」と形容される斑鳩の里の景観を生み出している。

一方、戦後開発された住宅団地を含む自治会においても、平成6年(1994)に龍田神社の祭礼の太鼓台が新調されるなど、伝統行事に参加し、それらを継承していく新しい担い手としての動きがみられる。



■斑鳩の里を詠んだ歌

詩歌	詠み人
ちはやぶる 神代もきかず 龍田川 から紅に 水くくるとは	在原業平 (825~880)
年毎に もみぢ葉流す 竜田川 みなとや秋の とまりなるらむ	紀貫之 (872~945)
嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり	能因法師 (988~没年未詳)
吹きはらふ 風もとがめず さもこそは 紅葉にあける 神南の森	下河辺長流 (1627~1686)
初紅葉 お染めといはば 立田山	与謝蕪村 (1716~1783)
柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺	正岡子規 (1867~1902)
秋風に 又来りけり 法隆寺	高浜虚子 (1874~1959)
うまやとの みこのまつりも ちかつきぬ まつみとりなる いかるかのさと	會津八一 (1881~1956)
秋真昼 ふるき御寺に わが一人 立ちぬあゆみぬ 何のにおいぞ	若山牧水 (1885~1928)
日の照りて 桜しずけき 法隆寺 おもえば遠き 旅ありき	北原白秋 (1885~1942)

■斑鳩町ゆかりの人物

<p>しょうとくだいし 聖徳太子(574~622)</p> 	<p>敏達天皇3年(574)、用明天皇の皇子(厩戸皇子)として生まれ、推古天皇元年(593)に推古天皇の摂政として政治を行う。推古天皇9年(601)、斑鳩宮の造営を始め、推古天皇13年(605)に居住したとされる。斑鳩にはこのほか、岡本宮や飽波葦垣宮等の宮殿を造営した。 <small>あくなみあしがきのみや</small> 「三宝興隆の詔」を示し、十七条の憲法、遣隋使の派遣、法隆寺(斑鳩寺)の建立など、我が国の政治の発展や文化の向上と仏教興隆に貢献した。推古天皇30年(622)2月22日、斑鳩宮にてこの世を去った。</p>
<p>やましろのおおえのおう 山背大兄王(?~643)</p> 	<p>聖徳太子の子。生年は不詳。母は蘇我馬子の娘、刀自古郎女。 <small>としこのいらつめ</small> 推古天皇崩御に際し、蘇我蝦夷の推す田村皇子と皇位を争い敗れた。その後も聖徳太子の皇子・皇女たちにより形成される上宮王家の中心人物として、政治的発言権を有していた。このことが、皇極天皇2年(643)、蘇我入鹿により上宮王家が滅亡させられる原因となった。このとき、東国へ逃れるように勧めた三輪文屋君の進言を入れず、聖徳太子の教えを守り、斑鳩寺に入り子弟・妃妾らとともに自害した。</p>
<p>ぎょうしん 行信(?~750)</p> 	<p>僧都。三論、法相の学僧。法隆寺上宮王院(東院)の草創の功労者。聖徳太子の斑鳩宮の廃墟を悲しみ、東院を創らしめた。 天平9年(737)、聖徳太子の御持物という鉄鉢・錫杖・香炉・厨子などを東院に奉納、天平10年(738)律師に、天平20年(748)頃大僧都に補任、その頃東院を建立、聖霊会を始行、『仁王般若経疏』を著述、2,700余巻の写経を発願した。天平勝宝2年(750)に没する。</p>
<p>かたぎりかつもと 片桐且元 (1556~1615)</p> 	<p>近江の生まれ、豊臣秀吉の家臣で、賤ヶ岳の戦いでは七本槍の一人として活躍した。関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601)に、徳川家康より大和国2万8千石の所領を与えられ、龍田城主になる。豊臣秀頼寄進の法隆寺伽藍大修理の作事奉行を勤める。 また、安村喜右衛門<small>やなぶね</small>に魚梁船を造らせて米などを大坂に運べるようにするなど、大和川の舟運交通の整備やため池づくりによる法隆寺村や龍田村の治水など、地域の発展に貢献した。</p>
<p>なかいまさきよ 中井正清 (1565~1619)</p> 	<p>中井家は法隆寺村西里の出身の大工棟梁家で、正清は徳川家康に重用され、慶長11年(1606)には従五位下大和守に叙任された。 法隆寺の慶長大修理のほか京都御所、二条城、名古屋城、日光東照宮等の往時を代表する建造物の普請に携わった。 元和5年(1619)、正清は旅先の江州水口で病に倒れ没するが、一代で築いた大棟梁の地位は子孫代々五畿内・近江六カ国の大工・杣・木挽を支配する京都大工頭として幕末まで受け継がれた。</p>

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章



<p>ともばやしみつひら 伴林光平 (1813~1864)</p> 	<p>国学者・勤王家・歌人。文化10年(1813)河内国志紀郡林村(現・藤井寺市)に生まれる。西本願寺・薬師寺・法隆寺で仏教を研鑽する一方、漢学や歌道を学ぶ。因幡の飯田秀雄に国学を学び、このとき伴林光平と改名した。29歳のとき八尾の教恩寺の住職となるが、一方『河内国陵墓図』や『巡陵記事』などを著す。その後法隆寺の平岡鳩平とも交わり、国学と勤王活動に生きることを決意、文久3年(1863)天誅組に参加、捕らわれ元治元年(1864)に刑死。明治24年(1891)に従4位を追贈される。</p>
<p>きはたけはるふさ 北畠治房 (1833~1912)</p> 	<p>天保4年(1833)法隆寺村三町の煙管屋末重の次男に生まれる。通称は煙管屋鳩平。早くから勤王の志厚く、伴林光平らと京都・摂津の間を奔走し、尊皇攘夷の大義を唱え天下の志士と交わる。文久3年(1863)に名を平岡武夫(鳩平)と改め、天誅組の乱に参加した。明治維新後、北畠治房と名を変え、東京裁判所長、大審院判事、大阪控訴院院長などを務め、明治29年(1896)に男爵の位を与えられた。晩年は法隆寺村にもどり、79歳でこの世を去った。</p>
<p>たつみならたろう 辰巳樞太郎 (1865~1940)</p> 	<p>貴族院議員。慶応元年(1865)西里の豪農に生まれる。明治28年(1895)法隆寺村村会議員に当選、龍田村外7カ村高等小学校組合議員、龍田村外2カ村尋常高等小学校組合議員に就任、以後昭和11年(1936)まで41年間勤める。明治37年(1904)に貴族院議員に当選、明治39年(1906)に勲四等旭日小授賞を授与される。ほか法隆寺聖徳会会長、法隆寺信徒総代、中宮寺門跡信徒総代などを歴任し、斑鳩町の発展に尽くした。</p>
<p>さえきしょういん 佐伯定胤 (1867~1952)</p> 	<p>法隆寺住職。法隆寺村出身。明治26年(1893)法隆寺勸学院の開設に伴い内典講師に就任。法隆寺学頭、権僧正に昇進。明治29年(1896)法相宗勸学院院長、慈恩会を再興、翌年法隆寺副住職に就任。明治34年(1901)薬師寺住職に就任。翌年法相宗管長に就任。明治36年(1903)法隆寺住職に就任。大正10年(1921)に聖徳太子1300年聖霊会の講師を務める。昭和4年(1929)帝国学士院会員に勅任。昭和25年(1950)に法隆寺長老、聖徳宗の開宗を表明した。</p>
<p>にしおかつねかず 西岡常一(1908~1995)</p> 	<p>明治41年(1908)、法隆寺村西里に生まれる。西岡家は代々法隆寺に仕える大工で法隆寺大工や鶯寺大工と呼ばれ、幼少の頃から祖父と父に師事し、宮大工の伝統技術を学ぶ。宮大工として昭和9年(1934)から法隆寺昭和大修理の棟梁を勤め、さらに法輪寺三重塔、薬師寺金堂や西塔などの修理や再建に取組む。また、古代の大工道具の「ヤリガンナ」を復元し、木工技能の保存技術の伝承や後進の指導に力を注いだ。昭和52年(1977)5月11日に選定保存技術「建造物木工」保持者に認定された。</p>

第5節 文化財の現状と特性

1 指定・登録文化財

斑鳩町の指定文化財は、令和4年(2022)3月31日現在、国指定が226件、県指定が9件、町指定が3件で、合計238件である。指定文化財のうち、有形文化財が228件で95%近くを占め、そのうち、建造物は51件が指定されている。

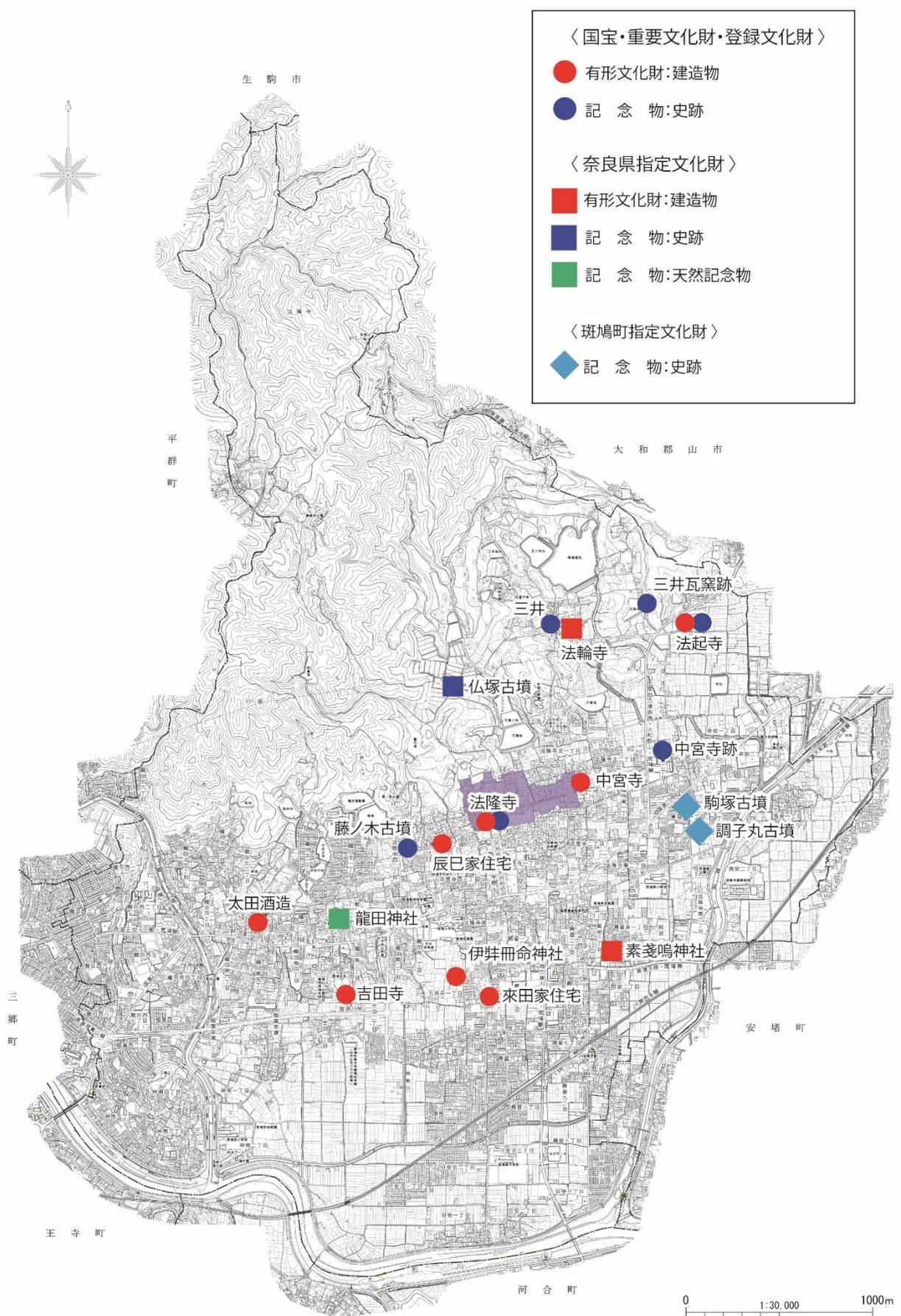
このほか、建造物としては、登録有形文化財21件がある。

表1-3(1) 文化財の種別指定状況(令和4年3月31日現在)(単位:件)

種別	区分		国指定	県指定	町指定	合計
有形文化財	建造物		49 (うち国宝19)	2	0	51
	美術工芸品	絵画	15	0	0	15
		彫刻	106 (うち国宝19)	1	0	107
		工芸品	28 (うち国宝4)	4	0	32
		書跡・典籍	15	0	0	15
		歴史資料	4	0	1	5
		考古資料	3	0	0	3
小計		220 (うち国宝42)	7	1	228	
記念物	遺跡		6	1	2	9
	動物、植物、地質鉱物		0	1	0	1
小計			6	2	2	10
合計			226	9	3	238

表1-3(2) 文化財の種別登録状況(令和4年3月31日現在)(単位:件)

種別	区分	国登録
有形文化財	建造物	21



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

図1-18 指定登録文化財（建造物、史跡・天然記念物）の分布状況

(1) 国指定文化財

斑鳩町にある国指定文化財226件の内訳は、有形文化財が220件、記念物が6件となっている。

有形文化財は、重要文化財（建造物）49件（うち国宝19件）および重要文化財（美術工芸品）171件（うち国宝23件）、記念物は史跡6件となっている。（なお、1件（法隆寺食堂及び細殿）については国宝と重要文化財に指定されている部分があることから、内訳と合計は一致しない。）

国宝の建造物は、法隆寺に18件あり、法起寺三重塔を合わせて19件となっている。世界最古の木造建造物である金堂をはじめ、飛鳥様式を伝えるものが多数みられる。また、重要文化財の建造物は、法隆寺に28件あり、きちでんじ吉田寺多宝塔、いざなぎのみこと伊弉册命神社本殿を合わせて30件となっている。

重要文化財（美術工芸品）の内訳は、絵画は15件、彫刻は106件（うち国宝19件）、工芸品は28件（うち国宝4件）、書跡・典籍は15件、歴史資料は4件、考古資料は3件となる。これらの美術工芸品は、法隆寺、法輪寺、中宮寺、法起寺のほか、7か所の寺院にある。

さらに、史跡として、法隆寺旧境内、三井瓦窯跡、三井(井戸)、中宮寺跡、藤ノ木古墳、法起寺境内の6件がある。また、その他、登録有形文化財(建造物)が21件（4か所）あり、寺院に関するものが1件、民家が20件となっている。

【建造物】

■国宝(建造物)

法隆寺金堂

飛鳥時代。桁行5間。梁間4間。2重。初重裳階付き。入母屋造。本瓦葺。裳階板葺。

法隆寺の中心殿堂。上層には卍崩しの組子を入れた高欄があり、人字形の割束で支えていて、雲形の肘木とともに飛鳥様式がみられる。内部には釈迦三尊像、薬師如来像、阿弥陀如来像、四天王像、毘沙門天像、吉祥天像などを安置している。



金堂



法隆寺五重塔

飛鳥時代。3間5重の塔婆。初重裳階付き。本瓦葺。裳階板葺。

各層の透減が大きく安定感がある。細部は金堂と同様であるが高欄の下に割束はない。初重の四面に、和銅4年(711)に造顕した釈迦入滅の伝記に関する様子を表現した塑像群を配している。



五重塔

法隆寺中門

飛鳥時代。4間2戸2重の門。入母屋造。本瓦葺。

金堂や五重塔に通じる正門にあたる。この門には胴張のある柱や中国の竜門、雲南の石窟寺院などにある雲形の肘木、卍崩しの欄干、人字形の割束を用いるなどの特徴がみられる。



中門

法隆寺大講堂

平安時代。桁行9間。梁間4間。入母屋造。本瓦葺。

西院伽藍の北正面に位置する。この建物は寺僧たちが仏教を研鑽する道場であり、修正会、涅槃会、仏正会、慈恩会などの法会を営むところでもある。現在の建物は延長3年(925)に雷火によって創建の建物が焼失した後、正暦元年(990)に再建したものの。



大講堂

法隆寺東大門

奈良時代。3間1戸の八脚門。切妻造。本瓦葺。

西院の東側の築地塀に開かれた門。「中ノ門」ともいう。発掘調査と解体修理によって移築されたものとなり、移築前は南面していた門であった。側面に二重虹梁こうりょうかえるまた臺股の架構を表しており、門に入って上を見ると屋根が前後に2つ並んでいるように見える。



東大門

法隆寺東院夢殿

奈良時代。八角円堂。本瓦葺。

上宮王院（東院）の創建に際し、最初に建立された中心的建物である。太子等身と伝えられる救世観音像を本尊として祀り、上宮王院創立者の行信や、再興の功労者の道詮の像も安置している。寛喜2年(1230)に、軒の出を増し、屋根の勾配を急にするなど大改修が行われた。



夢殿

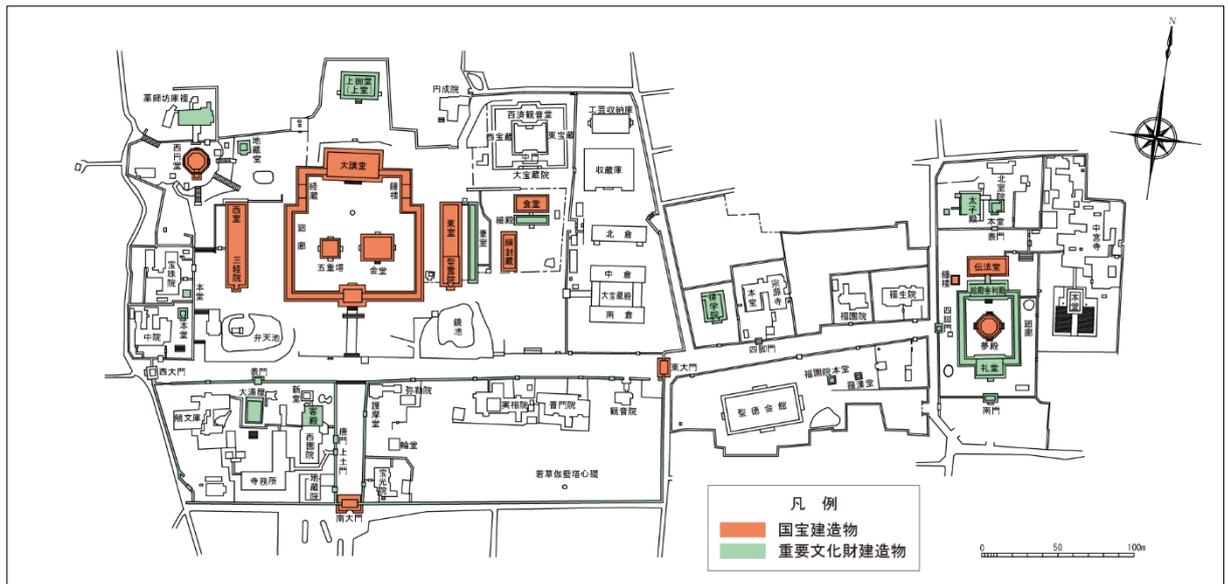


図1-19 法隆寺の国宝建造物と重要文化財建造物

法起寺三重塔

飛鳥時代。3間3重の塔婆。本瓦葺。

柱間寸法は法隆寺五重塔の初重・三重・五重とほぼ同じ寸法で構造も法隆寺五重塔と共通する。『聖徳太子伝私記』（暦仁元年(1238)成立）に伝わる塔の露盤銘には、慶雲3年(706)に相輪部分が完成したことが伝えられ、この頃に伽藍が整ったものと考えられている。



法起寺三重塔



■重要文化財(建造物)

法隆寺西院大垣

南面 南大門東方全長208.9m、西方全長103.8m。築地塀。本瓦葺。

東面 東大門南方全長86.4m、北方折曲り延長63.5m。築地塀。本瓦葺。

西面 西大門南方折曲り延長69.8m、北方全長6.2m。築地塀。本瓦葺。



西院大垣（南面）



西院大垣（東面）



西院大垣（西面）

平安時代長元年間(1028～1037)頃に南大門・西大門の建立があったときには現在の位置に大垣があったものと考えられる。その後、築き替えが行われているが、西面の西大門から南方部は元禄に築き替えを受けておらず、慶長大修理を降るものではない。

法隆寺薬師坊庫裡^{くり}

主屋桁行18.31m。梁間西面7.88m。東面10.21m。東面切妻造。西面寄棟造。棧瓦葺。

薬師坊は西円堂の北側に建つ西円堂堂司の住坊であるが、坊の創立や現在の庫裏の建立年代は明らかではない。居住部に残る柱・舟肘木などの古い部材は室町時代を降らないと考えられるが、その後何度か大修理があったようで、現在の形は江戸時代末のものと考えられる。



薬師坊庫裡

法隆寺上御堂^{かみのみどう}（上堂）

桁行7間。梁間4間。入母屋造。本瓦葺。

講堂の裏手に、かなりの急な斜面を平らにして建つ。創建の時期は明らかではないが、『法隆寺別当記』（南北朝一室町時代）などによると、永祚元年(989)と康和年中(1099～1104)とに倒れたという。再建は鎌倉時代末で、元亨4年(1324)に本尊を講堂から移す。礎石の円形の造出し、床が土間で、梁間4間とする点などは天平時代から平安時代の形式であり、創立の古さを示す。しかし軒高は高く、飛貫を用い、正面に棧唐戸を釣っている点などは再建の時代を示す。



上御堂

法隆寺東院^{らいどう}礼堂

桁行5間。梁間4間。切妻造。本瓦葺。

礼堂はもとの中門で、『東院資財帳』（天平宝字5年（761）成立）の「檜皮葺門貳門」のうちの「長七丈。広二丈一尺」とする建物の後身である。中門・回廊は行事のときの人の座となる性格を有していることから、初めから礼堂的な要素が大きかったと考えられる。現礼堂は鎌倉時代に再建されたものである。



東院礼堂

法隆寺東院舍利殿^{しゃりでん}及び絵殿^{えでん}

桁行7間。梁間3間。切妻造。本瓦葺。

『東院縁起』（鎌倉時代成立とされる）には「七間御経蔵」と記され、聖徳太子が所持した経典・鉄鉢などを納めるための建物である。承久元年（1219）に建替、このとき前方に1間拡張し吹き放しの礼拝所とし、その両脇に回廊を接続させて現在の姿になった。



東院舍利殿及び絵殿

吉田寺^{きちでんじ}多宝塔

3間の多宝塔。本瓦葺。1辺約10尺。

初層は丸柱を用い、初層中央間に臺股（股内に梵字を入れる）をおき、その上に板臺股を重ねる。内部に来迎柱を立てその前に仏壇を置き、その上部を二重に折り上げた小組格天井^{こうてんじょう}を張る。寛正4年（1463）の建立。



吉田寺多宝塔

伊弉册命^{いさなきのみこと}神社本殿

一間社春日造。こけら葺。桁行2.65尺。梁間3.2尺。

斗拱は全3斗とし、4面と向拝に臺股を入れ、向拝柱と海老虹梁でつなぐなど装飾豊か。主殿を前後に二分してその境に扉を入れ、前面に格子をはめる。天正8年（1580）の建立。



伊弉册命神社本殿

【美術工芸品】

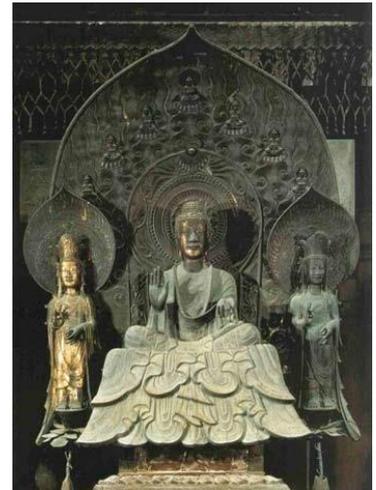
■国宝（彫刻）

銅造釈迦如来及両脇侍像（釈迦三尊像）

飛鳥時代。3軀。銅造。鍍金。中尊像高87.5cm。

左脇侍像高92.3cm。右脇侍像高93.9cm。

法隆寺金堂の本尊。方形の須弥座の上に蓮弁一葉形の大光背を背にした3尊で一光三尊の形式である。中尊の釈迦如来は右手を施無畏の印、左手は与願の印を結び、腰高な二重宣字座に坐る。その杏仁形の眼とアルカイクスマイルを浮かべた表情には独特の神秘的な雰囲気漂う。止利仏師作。



銅造釈迦如来及両脇侍像
（釈迦三尊像）

そ ぞうとうほん 塑造塔本四面具五重塔安置

奈良時代。塑造。彩色。

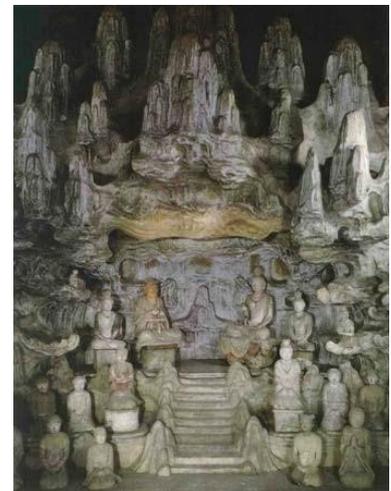
東面 維摩居士坐像（像高45.2cm）ほか15軀。

南面 弥勒仏倚像1軀（像高81.0cm）。

西面 金棺1基。舍利塔1基。侍者坐像。

北面 涅槃釈迦像1軀（全長99.5cm）。侍者坐像31軀。

法隆寺五重塔初重の内陣4面に、心柱を中心にして四天柱を囲んで塑造の岩窟を築き、これに維摩詰像土（東）、涅槃像土（北）文舍利仏土（西）、弥勒仏像土（南）をあらゆる塑造の群像が置かれる。



塔本塑像（東面）

木造観音菩薩立像（百済観音像）

飛鳥時代。木造。彩色。像高209.4cm。

本軀、光背、台座はいずれも樟材を用い、本体は両手の臂を含み足下の台座蓮肉部に至るまでを一材から造り、持物の水瓶は檜材を使っている。極端に細身で背が高い姿が、異国的な感を与え、朝鮮、百済からもたらされたという伝説をうみ、百済観音という異名をもつ。

法隆寺大宝藏院百済観音堂所在。



木造観音菩薩立像
（百済観音像）



銅造観音菩薩立像
（夢違観音像）

銅造観音菩薩立像（夢違観音像）

白鳳時代。銅像。鍍金。像高86.9cm。

もと東院絵殿の本尊であった。夢違観音と呼ばれ、悪夢をみたとき、この像に祈れば吉夢に替えてくれ、吉夢をみ

るとそれを実現してくれるといわれる。かすかに微笑をたたえた童顔で、上半身裸形の体は飛鳥時代の像に比べ、実人に近くなり体軀も丸みを帯びる。

法隆寺大宝蔵院西宝蔵所在。

木造観音菩薩立像（救世観音像）

飛鳥時代。木造。彩色。像高178.8cm。

法隆寺東院夢殿の本尊で、堂内中央の漆塗りの八角厨子内に安置されている。樟材の一木造で、白土地金箔押で仕上げられ、金銅像と見まがうような硬さを示している。聖徳太子等身の像といわれ秘仏とされていたが明治17年(1884)にフェノロサと岡倉天心によってその姿が明らかにされた。

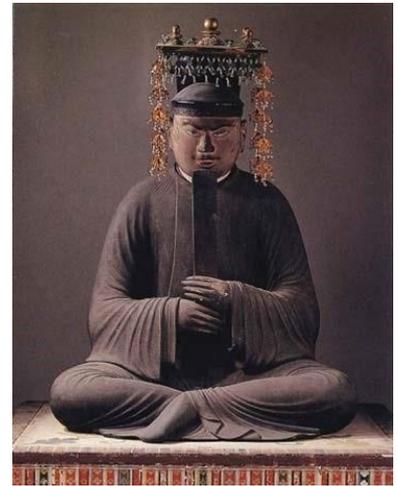


木造観音菩薩立像
(救世観音像)

木造聖徳太子坐像

平安時代。木造。彩色。像高84.2cm。

聖霊院の本尊として、侍者像4体と共に正面大型の厨子の中に安置される。像は檜材の寄木造と思われ、頭体主要部はともに前後に割り、像内を大きく割って空洞にして、再びこれを接合する割り矧ぎ造りで造られている。できた像内の空間に銅造救世観音立像（像高24.2cm）と経巻3巻が奉籠されている。



聖徳太子坐像

■国宝（工芸品）

玉虫厨子

飛鳥時代。木造。漆塗。彩色。金銅・玉虫翅装。総高226.6cm。幅136.7cm。奥行119.1cm。

推古天皇の念持仏と伝える漆塗の厨子。大棟に鴟尾をあげた単層入母屋造で鍔葺の宮殿部と須弥座、台脚で構成。透彫りの金銅金具の下に玉虫の翅鞘を敷いていることから玉虫厨子という。宮殿部と須弥座に密陀絵もしくは漆絵で天部菩薩、靈鷲山、仏供養、施身聞偈、捨身飼虎、須弥山が描かれており、宮殿内部には銅板押出千仏像が飾られている。

法隆寺大宝蔵院西宝蔵所在。



玉虫厨子



しきししかりもんきん 四騎獅子狩文錦

中国唐代（7世紀）。^{きぬにしき}緯錦。縦250.0cm。横134.5cm。

薄茶色をおびた地に大きな円形の主文を3個ずつ5段に配した長方形の緯錦。主文は四方に重角文を置いた連珠円文で囲まれた中に花樹と有翼馬にまたがって振り向きざまに獅子を射る^{ゆうぜん}有鬚の騎士を左右対称に配した構図で、この連珠円文の周囲にパルメット風の花唐草文を配して副文としている。

法隆寺宝蔵北倉所在。



四騎獅子狩文錦

てんがい 木造天蓋

箱形天蓋。木造。彩色。3個。

中之間天蓋。白鳳時代。幅275.0cm。奥行246.0cm。

西之間天蓋。白鳳時代。幅242.5cm。奥行217.0cm。

東之間天蓋。鎌倉時代。幅240.0cm。奥行219.0cm。

法隆寺金堂の内陣に安置されている3個の天蓋。中の間は釈迦三尊像の上部、西之間のものは阿弥陀如来像の上部、東之間の物は薬師如来像の上部にある。3個の天蓋ともに天人像と鳳凰が付属している。



木造天蓋

■重要文化財（考古資料）

木造百万小塔

奈良時代。木造。轆轤挽。白土塗。塔高20.5cm～21.8cm。底径10.5cm。相輪高8.3cm。

塔身部は檜材で円形の基壇上に円形3重の木造小塔、その上に水木犀又は桂材の相輪を嵌め込み、塔心に陀羅尼の小巻が納められている。称徳天皇が恵美押勝の乱後、国家の安泰を祈って100万基を造ったことからその名が由来する。その百万塔を十大寺に納めたが現在では法隆寺にのみ現存している。塔102基陀羅尼100巻が重要文化財。陀羅尼は年紀の明らかな印刷物としては世界最古のものである。

法隆寺宝蔵中倉・大宝蔵院・東宝蔵所在。



木造百万小塔

■登録有形文化財（建造物）

辰巳家住宅主屋ほか12件

主屋は大正4年(1915)。建築面積410㎡。木造二階建。入母屋造。棧瓦葺。

法隆寺から藤ノ木古墳を結ぶ道沿いの法隆寺西里の西寄りに位置する。長屋門があり、周囲を棧瓦葺の屋根をのせた土塀で囲む。間口30mに及ぶ大型の主屋のほか、蔵や茶室等で構成され、特に宅地の南面の切石積みの石垣はみごとな造りとなっている。



辰巳家住宅

太田酒造主屋ほか5件

主屋は文政12年(1829)。建築面積203㎡。木造二階建。瓦葺。

龍田の町並みの西端近くに位置し、南に折れて国道25号にであう街道に南面して建つ。主屋は二階建の町家で土間の東に下見世、西に3室と5室を配する。ほかに3つの土蔵と蔵前小屋、茶室からなる。



太田酒造

來田家住宅離れ

大正3年(1914)。建築面積59㎡。木造二階建。瓦葺。

1階を和風、2階を洋風とした折衷建築。2階外部はドイツ壁風の仕上げで出隅部にコリント式の角柱形を付ける。



來田家住宅離れ

中宮寺表御殿

江戸後期。建築面積117㎡。木造平屋建。入母屋造。本瓦葺。

本堂の北側に西面して建つ。南東側に御上段の間を設け、格天井とし、北東隅に御座の間など計6室を配する。



中宮寺表御殿

【遺跡】

■史跡

法隆寺旧境内

西院伽藍は、北端は上御堂と円成院の脊部付近を連ねる線に、南端は南大門に、東西両端は東西大門に至る区域。東院伽藍は、南北は北室院裏の道路から南大垣に至り、東西は西大垣から中宮寺境内の西方に至る区域。金堂・五重塔など創建の姿をとどめ、さらに斑鳩宮跡・若草伽藍跡などを含む。

三井瓦窯跡

法起寺西側の尾根丘陵の瓦塚2号墳後円部の西側斜面に位置する。昭和6年(1931)に発見された、約40度の勾配を持つ地下式有階有段登窯で、窯内からは法輪寺所用の平瓦のほか、法起寺出土の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と同範瓦が周辺から出土していて、7世紀後半から8世紀初めの瓦窯とみられる。



三井瓦窯跡

三井（井戸）

法輪寺旧境内の範囲に含まれ、聖徳太子が開掘した井戸のひとつと伝えられる。深さ約4.25m、上部直径約91cm。側壁は中膨れの筒状をしている。底に4個の石を方形に組合せ、内外の隅間から水が湧出する。底面から約1.15mは乱石積み、その上約3mは扇形の瓦罨を積んでいる。



三井

中宮寺跡

中宮寺の創建当初の寺跡。現中宮寺の東方約500mに位置する。昭和38年(1963)以降の発掘調査の結果、四天王寺式伽藍配置の塔と金堂の基壇が確認され、塔基壇の地下約2.5mからは花崗岩製の塔心礎が発見されている。



中宮寺跡 金堂基壇（発掘調査状況）

藤ノ木古墳

6世紀後半。円墳。直径50m以上、高さ約9mと想定される。朱塗りの刳抜式家形石棺が納められた全長約14mの大型の横穴式石室を埋葬施設とする。出土品には、金銅製馬具類、金銅製冠、金銅製履、装飾大刀など約3万点に及ぶ副葬品が出土していて、いずれも国宝に指定されている。



藤ノ木古墳

法起寺境内

発掘調査により東に塔、西に金堂を配置する、法隆寺とは左右対称の伽藍配置で「法起寺式伽藍配置」と名付けられている。またその下層部には、飛鳥時代の遺物と共に、斑鳩宮や若草伽藍跡の遺構と振れが一致する北より西に約20度振れた下層遺構が発掘され、岡本宮とみられている。

(2) 県指定文化財

奈良県指定文化財9件のうち、有形文化財が7件（建造物2件、美術工芸品5件）で、記念物が2件（史跡1件、天然記念物1件）となっている。

有形文化財のうち、建造物は法輪寺西門、^{すさのお}素盞鳴神社本殿である。美術工芸品のうち、彫刻が1件、工芸品が4件となっている。

史跡については、仏塚古墳がある。

天然記念物については、龍田神社のソテツの巨樹がある。

【有形文化財】

■建造物

法輪寺西門

江戸時代。1間の上土門^{あげつちもん}（現在控柱付棟門）。本瓦葺。

この門は現境内地の西境を画する土塀に開かれている小さな門で、切妻造、本瓦葺の屋根となっているが、両妻の破風板内側に接して絵振板が張っており、形式は中世のものを伝えている。



法輪寺西門



すさのお 素戔鳴神社本殿

室町時代。一間社春日造。檜皮葺。

小規模な社殿で、向拝柱・身舎柱は共に土台上に立ち、身舎斗拱は舟肘木とし、正面にのみ臺股を入れ、比較的簡素である。斗拱の形式、臺股の輪郭、緩やかな向拝虹梁の反り等は中世末期の様式を示している。



素戔鳴神社

■彫刻

木造釈迦如来坐像

檜材。一木造。像高86.5cm。

再建の成った法輪寺三重塔の初層に、北面して安置されている。一木彫成像らしく側面の厚みも十分にあり、体貌は堂々とした趣がある。法衣を抜き衣紋に着し、裳先の出も少なく、衣文の彫り口も太めに力強く、古風である。平安前期から後期への過渡的な性格を示しており、製作時期は10世紀末頃とされる。



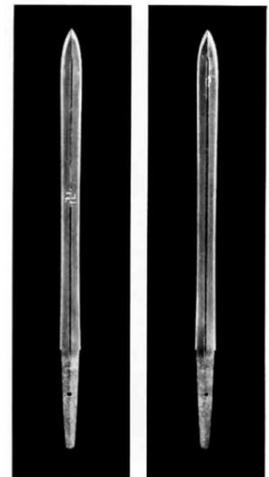
木造釈迦如来坐像

■工芸品

剣銘「信國」

室町時代。白鞘。刃渡り41.9cm。

両刃板目に柂のかかる鍛えで、刃文直刃小丁字、中心に目釘穴1個と銘文がある。剣身に樋及び卍の彫物があり、茎表に作者銘の「信國」、裏に「源家康」の金象嵌銘がある。大坂冬の陣に出陣した徳川家康が法隆寺阿弥陀院に宿泊した折りに奉納したものと伝わる。



剣銘「信國」
(左表・右裏)

阿弥陀三尊繡仏

室町時代。刺繍。掛幅装。縦100.2cm。横40.9cm。

中央に来迎の阿弥陀三尊、上方に天蓋、その左右に月輪中の梵字で、釈迦と薬師の種字を配する。図面下方には、大和絵風の風景屋舎を設け、家の中には合掌する一女性を表している。

図相及び繡技から見て室町時代の極めて早い頃の製作とみられる。

中宮寺所有。



阿弥陀三尊繡仏

木造扁額

木造。錆下地黒漆塗。彩色。縦型額。縦98cm。横68cm。厚5.8cm。

額板面に「中宮寺」の3文字を墨書する。額縁は内、中、外3区に分かれ、内区は枠形、中区は連珠文を彫出し、外区は花卉形を割り出し弁間に猪目を彫り込む。製作は、尼信如による中宮寺再興期のものと推定され、建治3年(1277)の棟上げから弘安4年(1281)の落慶供養の頃と考えられる。中宮寺所有。



木造扁額

銅錫杖頭

白銅錫製。高15.3cm。輪経10.7cm。

遊環はすべて亡失し、木製八角の漆塗りの柄を付けた手錫杖に仕立てられているが、当初は長い鉄杖を備えたものと考えられ、穂袋の下方に鉄杖の上端部が残っている。輪頂が尖らず輪周に括りのない安定した形は奈良時代の特徴を示す。製作は奈良時代末～平安時代初期と考えられる。



銅錫杖頭

【記念物】

■史跡

仏塚古墳

6世紀末頃。方墳。1辺約23m。高さ4m以上。

南方向に開口する両袖式横穴式石室。法隆寺西院伽藍北方の谷間にある。仏塚の名称は中世に石室を再利用して仏像を祀っていたことによる。



仏塚古墳



■天然記念物

ソテツの巨樹

龍田神社の境内、鳥居を入ると左側に高さ1mの石垣を巡らした盛土の上に、ソテツが東西に2群ある。特に東側のものは大きく根元の縦周囲は5.7m、最大樹幹の基部の周囲は2.7mにも及ぶ。



ソテツの巨樹

(3) 町指定文化財

町指定文化財は3件あり、有形文化財として安田家文書が、記念物として駒塚古墳、調子丸古墳がある。

【有形文化財】

安田家文書

安田家は、江戸時代の法隆寺村西里の大工棟梁家であり、大庄屋をつとめた家で、伝えられている文書には江戸時代の大工関係の資料が残されており、当時を知るうえで貴重な古文書である。安田家文書における大工関係絵図は232点を数え、建物名が判明しているものに「東大寺大仏殿建地割図」や「住吉大社神宮寺西塔建地割図」などがある。また、安田家は法隆寺村の庄屋であったことから、法隆寺関係の文書や検地帳、大塩平八郎の乱関連の文書、文化14年(1817)の法隆寺本町の火事の様子を描いた絵図など、江戸時代の法隆寺村の様子を伝える資料も多く残されている。これらは、平成21年(2009)に『安田家文書調査報告書』としてとりまとめられた。

【記念物】

駒塚古墳

古墳時代前期(4世紀後半)。前方後円墳。全長49m以上。

土師器、円筒埴輪が出土。国道25号の南側に所在する。前方部を南に向けた前方後円墳であるが、前方部が削られており、本来の全長は60m級の墳丘と推定される。駒塚という名称は、聖徳太子の愛馬である黒駒を葬ったとする伝承に由来する。造営時期からは、黒駒のために造られたものではないと推測されるが、斑鳩地域の早い段階での古墳として重要である。



駒塚古墳

調子丸古墳

5世紀中頃。円墳。直径約14m。

円筒埴輪、器財埴輪が墳丘周辺より出土している。駒塚古墳の南方約100mに位置する。名称は聖徳太子に仕え、黒駒の世話をしていた調子磨を葬ったとする伝承に由来する。古墳の北側の水田からは、馬具などの表現を施した精巧な造りの土馬の頭部から首にかけての部分が出土している。



調子丸古墳

2 世界文化遺産「法隆寺地域の仏教建造物」

法隆寺地域の仏教建造物は、平成5年(1993)12月に世界文化遺産に登録された。

法隆寺地域には世界最古の木造建築が数多く残っている。7世紀には法隆寺や法起寺ほかの仏教寺院が造営されて、これらの寺院では現在も宗教活動が続けられている。

法隆寺は7世紀初期に創建が始まり、現在の伽藍は西院及び東院と子院群で構成されている。西院は7世紀後半から8世紀初頭にかけて再建されたもので、東院は8世紀前半に建設されたものである。

西院の主要建物である金堂・五重塔・中門・回廊は、中国や朝鮮にも残存しない初期の仏教建築様式であり、両院のほかの主要建物は主に8世紀から13世紀に建てられたものである。両院の周囲にある子院は12世紀頃から建築が始まり、次第にその数を増やした。17世紀から18世紀にかけての建築も多く、日本の仏教建築の変遷を窺うことのできる文化遺産が集約されている地域といえる。

法起寺は7世紀に創建された寺院であるが、現在では、創建当初の建造物としては慶雲3年(706)に完成した三重塔のみが残っており、法隆寺西院と同様に我が国の初期仏教建築様式を伝えている。

構成資産は、国宝・重要文化財に指定され、法隆寺旧境内・法起寺境内は史跡に指定されて保存が図られている。



法隆寺西院伽藍



法起寺



■世界文化遺産「法隆寺地域の仏教建造物」の概要

登録年	平成5年（1993）	資産面積	法隆寺 14.6ha	法起寺 0.7ha
資産名称	法隆寺地域の仏教建造物		合計	15.3ha
構成資産	法隆寺、法起寺	緩衝地帯面積	570.7ha	
		合計面積	586.0ha	

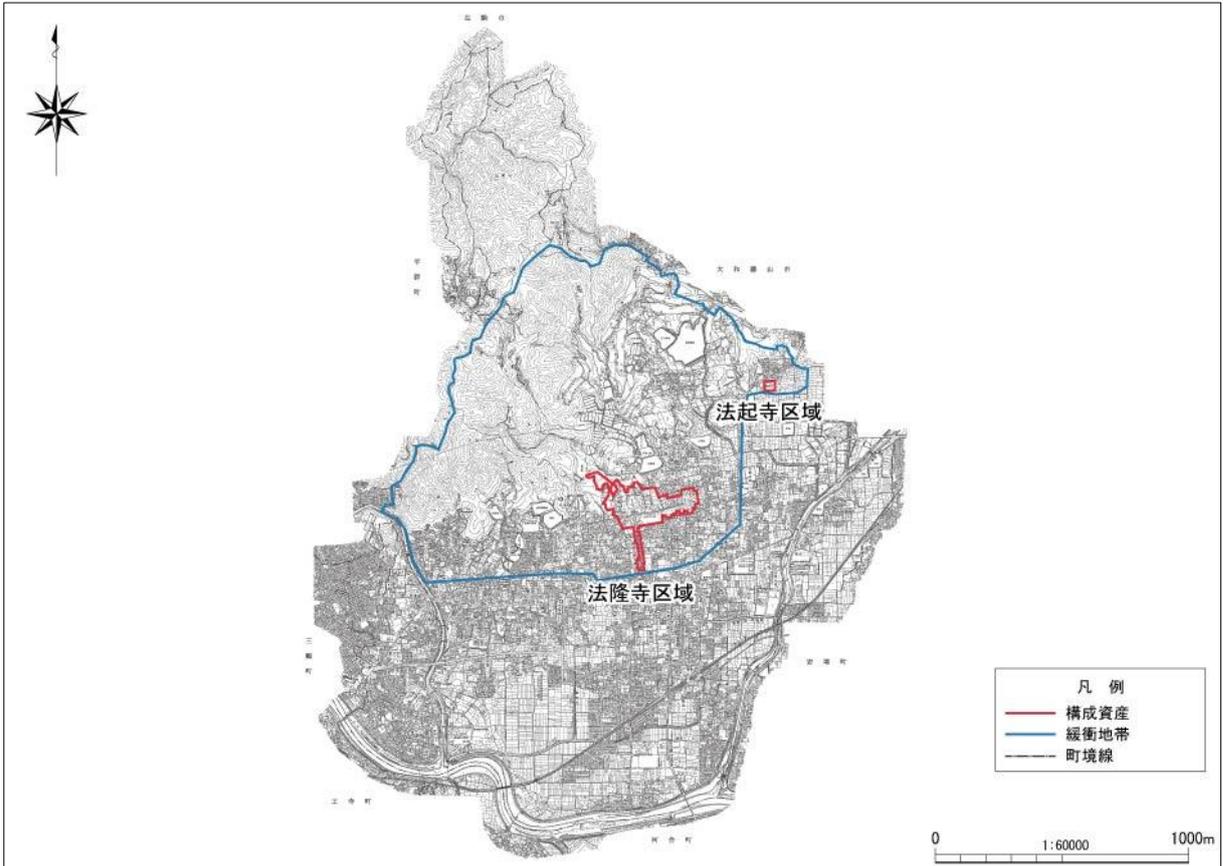


図1-20 世界文化遺産 「法隆寺地域の仏教建造物」の位置図

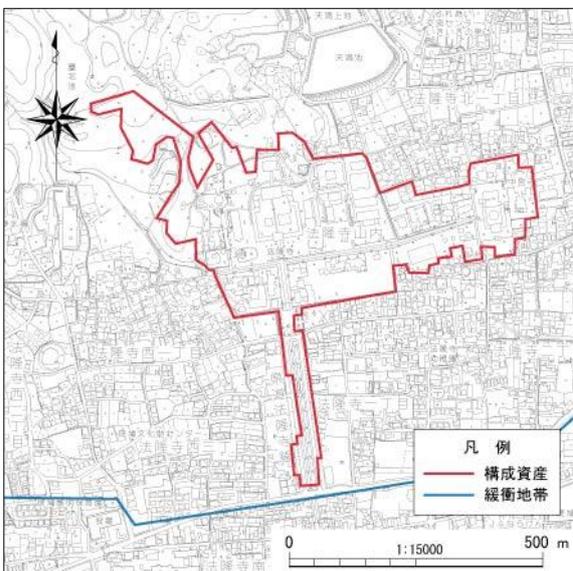


図1-21 法隆寺区域図



図1-22 法起寺区域図

序章
第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章

3 指定等文化財以外の文化財

指定等文化財以外にも今日まで継承されてきた建造物や祭り・行事が多数みられる。

建造物としては、平成21年度（2009）に奈良県による近代和風建築に関する総合調査が実施され、主として明治以降に、伝統的技法及び意匠を用いて造られた建造物が把握されている。38件のうち、法隆寺関係6件、保存状態の悪い2件、建て替えられた4件、登録文化財となった2件を除くと24件あり、すべて、未指定等文化財である。



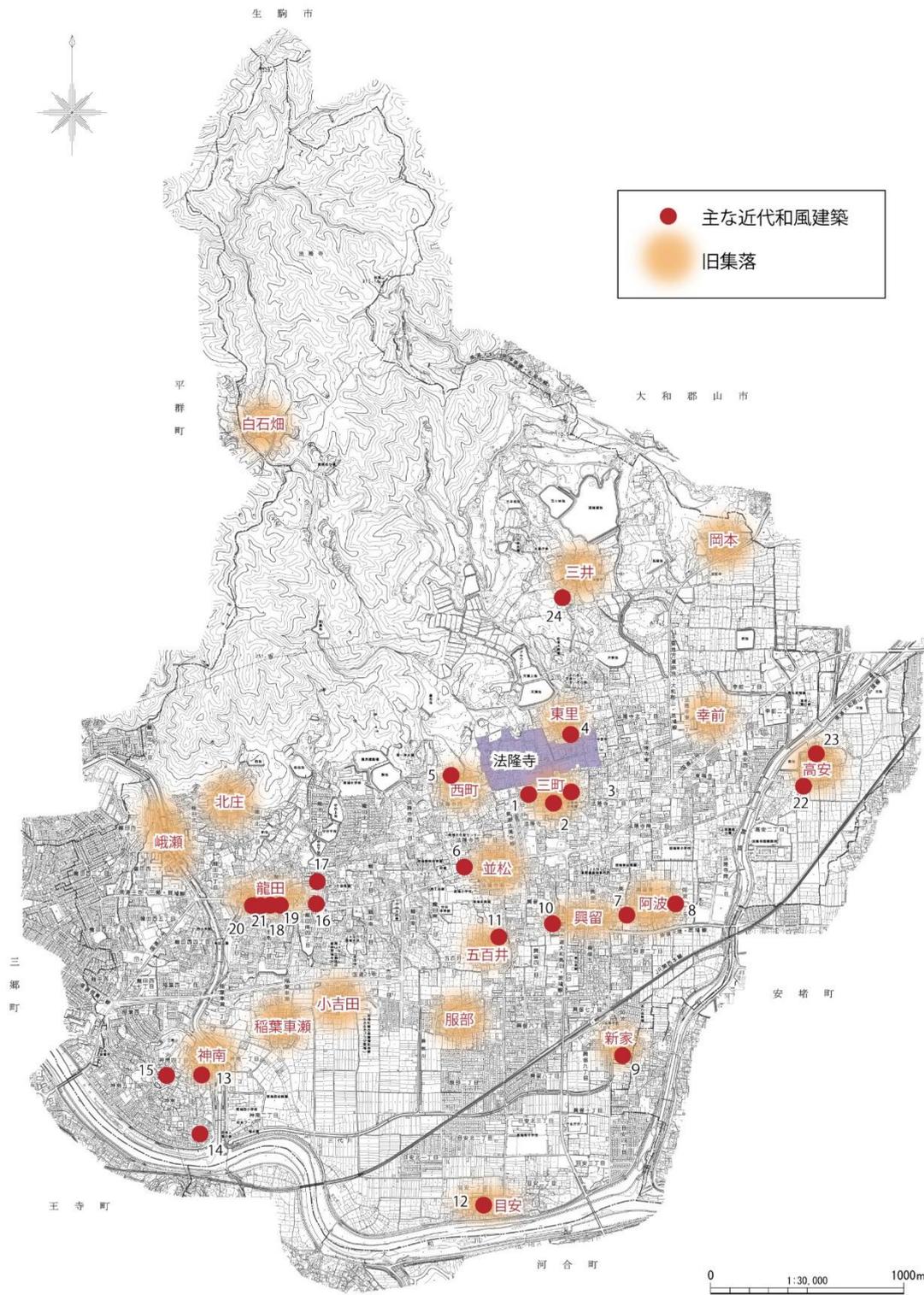
龍田集落の近代和風建築

また、祭り・行事としては、『奈良県祭り・行事調査報告書』（平成21年奈良県教育委員会）により、26件の祭り・行事が抽出できる。そのうち5件は法隆寺で行われており、21件は地域に伝わるものである。

表1-4 斑鳩町的主要近代和風建築一覧

	名称	所在地	用途	建築年代	構造形式	備考
1	石原家	法隆寺1-2	住宅	明治30年代	木造二階建	
2	松井家	法隆寺1-3	住宅	昭和大戦直後	木造二階建	
3	井上家	法隆寺2-2	住宅	明治	木造二階建	旧北畠男爵邸
4	吉長家	法隆寺北1-3	住宅	明治	木造平屋建	
5	植栗家	法隆寺西1-4	住宅	明治初期	木造二階建	棟梁西岡常吉
6	石原家	法隆寺西3-2	住宅	昭和9年	木造二階建	
7	西谷家	興留東1-8	住宅	明治以降	木造平屋建	
8	藤山家	阿波1-7	住宅	明治	木造平屋建	
9	浅井家	阿波3-11	住宅	明治	木造平屋建	
10	吉川家	興留1-5	住宅	江戸末期～明治	木造平屋建	大和棟
11	ニシキ醤油工場・大方家	五百井1-3	工場事務所住宅	明治33年(創業)	木造平屋建	
12	清水家	目安1-8	空き家	江戸末期～明治	木造平屋建	
13	植家	神南3-5	住宅	大正時代か	木造二階建	
14	孫七瓦工業株式会社・清水家	神南3-13	住宅事務所倉庫	明治末期	木造二階建	
15	北川家	神南4	住宅	昭和初期	木造平屋建	
16	増田家	龍田2-2	住宅	寛政年間以前	木造平屋建	
17	清水家	龍田2-3	住宅	明治4年	木造平屋建	
18	植嶋肥料株式会社	龍田3-1	住宅事務所	明治中期	木造平屋建	
19	田中家	龍田3-1	住宅	明治34年	木造平屋建	
20	三嶋家	龍田3-2	住宅	(不明)	木造平屋建	
21	三泰興産・西浦家	龍田3-2	住宅	明治30年代	木造平屋建	
22	勝田家	高安1-1	住宅	近世か	木造平屋建	大和棟
23	杉本家	高安1-6	住宅	近世か	木造平屋建	大和棟
24	山中家	三井1577	住宅	昭和初期	木造平屋建	

※『奈良県近代和風建築総合調査報告書』（平成23年（2011）3月発行）を編集



注：番号はP58の表と対応

図1-23 斑鳩町の主な近代和風建築の分布

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

■主な近代和風建築の概要

4. 吉長家

明治時代の築造と伝えられる。西院と東院の間、東里の住宅地に位置する。戦前に白石畑から移築されたと伝えられ、もとは主屋は南面していたが、移築後は北面している。



7. 西谷家

明治以後の築造といわれている。興留東の素蓋鳴神社の南側に位置する農家。長屋門、蔵、母屋いずれも保存状態が良い。背後の神社の森、南の田んぼとともに形成される景観は美しい。



8. 藤山家

明治時代の築造といわれている。阿波集落の南より、阿波神社の西側に位置する農家。長屋門から庭を経て母屋へのアプローチは典型的な農家スタイルを踏襲する。



9. 浅井家

明治時代の築造と思われる。法隆寺駅の南東の集落にあり、煙出しなどもあり、門などは立派な造りをしている。



10. 吉川家

近世から明治の築造と考えられる。興留集落にある斑鳩有数の地主の住宅。大和棟の主屋、門、庭など保存状態が良い。





<p>11. ニシキ醤油工場・大方家 ニシキ醤油の創業は明治33年(1900)であるが、大方家主屋は江戸時代の築造といわれる。五百井集落の北東に位置し、慶長年間から庄屋を勤めていた旧家である。</p>	
<p>13. 植家 大正期の築造といわれる。主屋、付属屋ともによく保存されている。建物の背は高く、虫籠窓も高く、式台がある。平成21年(2009)に土間部分が改修されている。</p>	
<p>14. 孫七瓦工業株式会社・清水家 明治末の築造とみられる。主屋の保存状態は良い。昭和55年(1980)頃までは瓦製造を行っており、奈良県下では一、二の歴史を持つ。</p>	
<p>22. 勝田家 塀や主屋の一部が近年改修されているが、小屋組などの主要構造体は、約350年前のものと伝える。大和棟の建物としての保存状態は良好である。</p>	

表1-5 斑鳩町の祭り・行事一覧（『奈良県祭り・行事調査報告書』等による）

法隆寺の 行事	聖霊院の朝拝之儀 舍利殿の舍利講 金堂の修正会 ^{しゅうしやうえ} 上宮王院夢殿の修正会 夢殿のお水取り 西円堂の修二会 ^{しゅうにえ} 西円堂の鬼追式（追難会） ^{ついなえ} 三経院の三蔵会 大講堂の涅槃会 聖霊院のお会式（小会式） 大講堂の仏生会 聖徳会館の夏季大学 弁天社の弁天会 護摩堂の護摩供 大講堂の慈恩会 ほか	法隆寺
祭り	斑鳩神社祭礼	斑鳩神社・法隆寺・三町・西里・東里・五丁町・並松
	龍田神社祭礼	龍田神社・龍田
	幸前神社の祇園祭	幸前神社・幸前
	秋葉神社の秋葉祭	秋葉神社・幸前
社寺の行 事	龍田神社の大祓歳旦祭	龍田神社
	龍田神社の十日えびす祭	龍田神社
	法輪寺の星祭り	法輪寺
	法輪寺の妙見会式	法輪寺
	吉田寺の鳩にがし（放生会）	吉田寺
	御本山如来御回在 中宮寺のオコナイ	西光寺・六斎寺・霊雲寺 中宮寺・幸前
講など小 地域の行 事	回り地藏	西里
	愛宕講	西里
	富士講	東里
	巖島神社の弁財天講	阿波
	雲観寺の観音講	目安
	春日講・元宮座	北庄
	素盞鳴神社の宮座講	服部
	神楽講	服部
	岩瀬講（行者講）	稲葉車瀬
トンド	大トンド	神南 ^{じんなん} ・稲葉車瀬 ほか

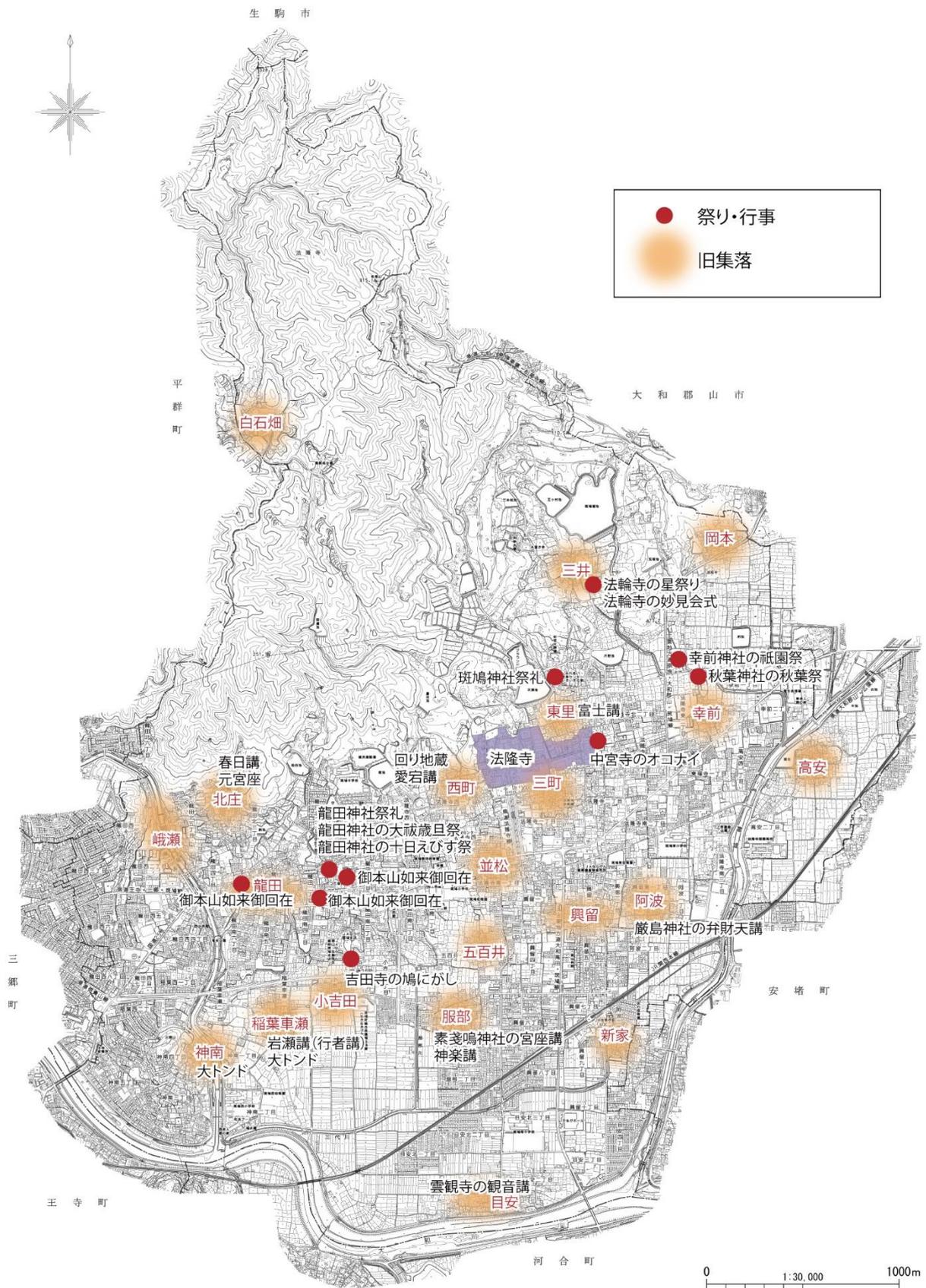


図1-24 町内に伝わる伝統行事分布（法隆寺の行事を除く）

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章